sword of sword

mohi-san

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｓｗｏｒｄ　ｏｆ　ｓｗｏｒｄ

【Ｎコード】
Ｎ３９９４Ｌ

【作者名】
ｍｏｈｉ－ｓａｎ

【あらすじ】
目が覚めると衛宮士郎は見知らぬ世界へ
そして一人の少女との出会いにより士郎の運命の歯車が動き出す。
この作品はＦａｔｅ（士郎）と聖なるかなのクロス作品です。
一部オリ設定とオリキャラが出てきます。

※この作品は現在凍結中です。

プロローグ（前書き）

聖なるかなとｆａｔｅのクロスです。

今回書くのが初めてなので至らないところやダメな所が多い駄文ですけど

勘弁してください。

独自設定とか入ってくるのでそういうのがダメなかたはご遠慮ください。

プロローグ

最近不思議な夢をよく見る。

どこかで誰かが呼ぶような、待っているかのような、朧げな夢

そこから場面は切り替わり、いつもの自身（うち）の世界へ

そこは何時も通りの赤い世界

何もない、・・・そう、剣のだけの墓標

その中でも一際存在感を放つ騎士王（彼女）の剣

今でも色褪せる事のなく覚えてる騎士王（彼女）の姿

でも、今はその剣の近くにもう一振りの剣が

彼女の剣に負けないほど、存在感を放っている

そこにあるはずなのに、そこにないような

そんな不思議な一振り

まるで俺の頭では認識できないような

俺はそんな剣など見たこともないのに

さも、昔からあったとばかりに違和感なく存在している

そしてその剣に意識を向けようとすると、そこで必ず意識が浮上する

そんな、夢

〈〈士郎〉〉

「なんでさ・・・」

その一言から始まった。
気がつけば何故か俺は森の中に仰向けに倒れていた。状況がまったくつかめない。
自分に落ち着け、落ち着け、と自己暗示かけながら今の現状を整理する。

そう・・・昨日は確か遠坂の工房にいたはずだ。彼女に何時ものように紅茶をいれようとして・・・・・・
何故だ？・・・そこからの記憶がまったくない。ダメだ、いくら思い出そうとしても思い出せない。
今はここにいる原因については考えるのは後回しにしょう。とりあえず身体を起こそう思ったら、全身に鈍い痛みが走り
思わず声がこぼれ出てしまった。

どうやら自分は怪我しているようだった。自分の現状を知るために自身に解析の魔術をを走らせる。

「解析開始（トレース・オン）」

どうやら全身に傷を負っているようだが、致命傷はないようだ。これなら自分なら数時間もしない内に完治するだろう。

それより気になったのは自分の魔力の貯蔵量だ。何故か今の自分では考えられないような量になっている。
今の俺は遠坂と同等・・・・・いや、それ以上かもしれない。なぜこんなになったのか自分でも想像がつかない。
考えられるのは俺がここにいることになった原因に関係してるのかもしれないが、今考えても無駄か・・・現状では何もわからない。
俺は考えるのを諦めて立ち上がる。さて・・・これからどうしようかと考えた時、そう遠くない所から女の悲鳴が聞こえた。

俺は意識を切り替えると、自己への変革を促す言葉をつむぐ。『トレース・オン』と。魔術で足に強化を施し、一直線に悲鳴が聞こえたところまで森を駆け抜ける。
時間にして数十秒ほどだろうか、強化した目に入って来たのは十匹ほどの野犬の群れに囲まれた少女だった。
俺は冷静に和弓と矢を投影し、今にも少女に襲い掛かろうとしていた野犬の一匹に矢を放つ。
矢は狙いを違わず犬の頭を貫いた。少女は目を見開いて何が起こったかわかっていないようだった。
俺はさらに牽制に野犬の周囲に続けざまに４本の矢を放つ。犬はそれに驚き散り散りに逃げていったようだ。
後に残ったのは、気が抜けて地面に座りこんでしまった少女だけだった。

〈〈少女〉〉

「大丈夫か」

そう言って話かけながら近づいてくる一人の人影。そこでワタシは初めて自分が助かったのだと理解した。
話しかけてくれた人の方に顔を向け、視線を移すと、そこには心底心配そうな顔をした青年がいた。
ここら辺では見たことのない服装に肌の色、それに特徴的な赤毛の髪

「・・・あっ、はい。だ・・・大丈夫です。助けてくれてあり・・・あれ？」

立ち上がろうと足に力を入れようとしたらそのまま、ペタンとまた地面に座り込んでしまいました。
青年は苦笑いを浮かべるとワタシの脇と膝の下に手を差し入れそのまま抱き上げてしまいました。
いわゆるお姫様抱っこというやつです。ワタシは恥ずかしさに慌てて――――

「えっ！・・・あ、あの・・・えっと、あの！？」

青年は優しげに笑うと

「立てないんだろ。安全な所まで運ぶよ。」

でもワタシは恥ずかしさと申し訳さで断ろうとしたんですけど、

「困ってる人を助けるのは当たり前だろ。それとも俺にこういう事されるの嫌か？」

と言われてしまったので素直に受け入れるしかありませんでした。
とりあえずお言葉に甘えてそののまま村まで運んで貰うことにしました。

「えっと・・・『士郎だ、衛宮士郎』・・・・・・あっ、ワタシはリリカです。それで士郎さんはここで何をしてたんですか？」

すると士郎さんは一瞬迷うような表情をした後

「ん～、迷子かな？」

「迷子？・・・・ですか」

「気がついたら森の中でね。途方にくれてたんだ」

なにか人には言えない事情があるんでしょうか。物凄く遠い目をしています、でもとても困っているみたいだし

「ハァ・・・もし良かったら、家に来ませんか。助けてもらったお礼もしたいですし。今晩泊まっていってください」

「いや、さすがにそこまでしてもらうのも悪いしな・・・」

と少し困ったような表情をしてました

「いえ、なんもお礼もしないのはこっちの気がすまないですし、それに困ってる人がいるなら助けるのは当たり前なんですよね？」

ワタシがそういったら少し驚いたような表情をして、そうだな。世話になるよ。って言って微笑を浮かべていました。

プロローグ（後書き）

文章を書くのは難しいですね。痛感しました

初めて書くので投稿ペースは遅いと思います。

週1でかけたら幸いです。次回予告としては次は少し暗い話になるかもです。

剣の世界1（前書き）

読んでくださった皆様、感想を下さった皆様、お気に入りに登録してくださった皆様ありがとうございます。
やっと2話めを上げることができました。
完結できるように頑張っていきます。
ちょっと前回の予告と違ってしまいましたがご了承ください。
あとここから独自設定が結構入っていきますのでそれがダメなかたはご遠慮いただいたほうがいいと思います。

3話目も上げれたら今日中に上げたいとおもいます。

剣の世界1

〈〈士郎〉〉

俺は今焦っている。何を焦っているかと言われれば今、自分の置かれた現状にだ。
あれからリリカの村まで行く間に色々なこを聞いたのだが・・・どうやらここは自分のいた世界と違う可能性が高いということだ。
まとめるとこんな感じだ。

1. 今俺がいるこの国の名は軍事国家グルン・ドラス、又は旧アイギア国と呼ばれる。

2. そして現在、現政権グルン・ドラスと旧王権アイギアの間で内紛に近い状態が起こっている。

と、いうことらしい。このことを聞いたときにリリカにはずいぶん疑いの眼差しを向けられたが、このさい黙殺しよう。とにかくだ。
俺は今までそんな国の名など聞いたことが無いし、ましてやそんな大きな事が起こっていれば、テレビや新聞などでなにかしら情報が伝わって来ているはずだ。
なのにそんなこと聞いたことすらない。
そして俺はここが元居た世界ではないのだと確信したのは、リリカの村を見たからだった。

村の中央には井戸があり、その周りには井戸を左右に挟むように建つ木造の西洋風の家屋。
そしてもちろんのこと水道など無いし、電気、ガスなど通っているはずが無い。
明らかに文明レベルが低い。ここの生活はまんま中世に遡ったような暮らしだ。
仮にここが俺がいた世界の欧州（仮定）辺りだとしても、ここまで技術レベルが低いのはありえない。

「――さん」

やはり俺はどうやってか知らないが異世界に飛ばされたと考えるのが一番妥当な考えだろう。

「――郎さん」

はぁ～、まだまだ考えねばならないことが沢山ありすぎて気が重くなる。

「士郎さん！」

「っあ・・・悪い、考え事して聞いてなかった。すまないリリカ。それでどうしたんだ？」

いつの間にか思考に没頭しすぎていたようだ。リリカが少し不満そうな表情になってる、失敗したな・・・

「別にいいですけど・・・それよりお風呂入ってきてください。士郎さんかなり汚れてますし、その間にワタシはご飯作っちゃいますので」

「飯作るなら俺も手伝うぞ」

「いいから入ってきてください。こちらはお礼なんですから、手伝ってもらうわけにはいきません」

「でも―『い・い・か・ら・入ってきてください』―はい・・・」

リリカの威圧感に負けて思わず頷いてしまった。だってしょうがないだろう。某赤い悪魔が一瞬見えてしまったのだから。
幼いのに末恐ろしい子だ。
とりあえず素直に従って俺は風呂にはいることにした。

〈〈リリカ〉〉

ワタシは風呂場に行く士郎さんを見送りながら思う、不思議な人だ

なと。
村に着くまでに色々なことを聞かれたけど、そのどれもがここら辺に住んでる人なら知ってて当たり前のことなのに、何も知らないみたいだった。
かなり遠い国からきたのだろうか？後で色々と聞いてみよう。
それにしても村に着いてからは上の空で心ここにあらずって感じだったけど、何か思うところでもあったのだろうか。
ここの村は至って平均的な村だと思うのだけど、何かおかしな所でもあったのかな。

「あっ・・・いけない、考え事する前にお料理しなくちゃ士郎さんがあがっちゃう」

ワタシは急いで手を動かす。今日の献立は何にしようかな？お客様がいるんだし、はりきらなきゃ。

〈〈士郎〉〉

風呂から上がって思うことは意外なほど快適だった。水道など無くてもなんとかなるものだ。
それに湯船もあったしな。まあ、湯船といっても五右衛門風呂とドラム缶風呂の中間のようなものであったが。
充分気持ちいいことにかわりはない。
それと驚いたのは部屋を照らす証明についてだ。このぐらいの文明なら中の明かりは蝋燭や松明などが普通だろ。

だがここの証明は電気も無いのに電球のように光っていた。最初は違和感が無さ過ぎて見逃していたが、よく考えればこの世界の技術レベルで考えれば異常だろ。
気になって調べてみたら、どうやら小さな魔石のような物が魔力をもとにして光っているようだった。これには驚愕した。
といことはここの世界では魔術が生活に浸透するくらい日常てきに使われていることになる。リリカの家だけ特別ということはないだろ。

これでこの世界には魔術師がいるとみてほぼ間違いないだろう。リリカを助ける時に咄嗟に投影魔術を使ってしまったが、これからはなるべく控えたほうがいいだろう。
俺の魔術は異端だ。それはこの世界でもたぶん変わらないだろう。
俺の力がバレたとしたら、決していいことにはならないはずだ。
周りの人にも迷惑が及ぶ可能性が高い。これから気をつけるにこしたことはないだろう。

「士郎さん、お湯加減はどうでしたか？」

「ああ、気持ちよかったよ。リリカも入ってきたらどうだ」

「あっ、そうさせて貰いますね。あがったら直ぐにお料理仕上げちゃいますから、待ててくださいね」

「わかった。ちゃんと待ってるから俺に気にせずゆっくり入ってくるといい」

「わかりました」

そういってリリカは微笑みながら風呂場に向かっていった。さて手持ち無沙汰になってしまったな。どうしようか。
料理を手伝おうかとも思ったが、流石に人の作りかけのものに手を加えるのはマナー違反だろう。
だいいち俺はここの食材や味付けなどについても良くわかっていない。下手に手を出さないほうがいいだろう。
それに手を出したらリリカが物凄く怒りそうな気がするしな。

とりえず近場の椅子に腰掛け、これからのことについて少し考えをまとめるか。
まず帰る方法を探さなくては。きっと向こうでは俺がいきなり消えてしまったよう状態だし、心配しているだろう。
まず俺がここに来てしまった原因としては”第二魔法”の可能性が一番高い。この場合は俺が自力で帰るのは難しいだろう。
限りなく可能性は低いが遠坂が迎えに来てくれるのを待つか、ここの魔術師に向こうの世界に送ってもらうかだ。だが両方とも厳しいだろう。

前者は何時迎えに来てくれるかわからないし、そもそも最後の記憶では俺は遠坂と同じ場所にいたはずだ。
最悪俺と同じ用に何処かに飛ばされた可能性がある。そしたら絶望的だ。
そして後者は何を対価に要求されるかわかったもんじゃない。戻っ

たら死体でした、なんて洒落にならないぞ。

あと可能性としては”第二魔法”以外のなんらかの原因でこちらに飛ばされた、もしくは召還されたかだ。
これについてはまったくの未知数だ。もしかしたら先に挙げた”第二魔法”より可能性があるかもしれないし、ないかもしれない。
なにしても情報が足りな過ぎるな。情報を集めてから再検討しよう。

最悪この世界で生きていく覚悟だけはしといたほうがいいかもしれないな。

「はぁ～・・・・・・」

なんて先行きが暗いんだ。でも嬉しい誤算もあった。魔術回路についてだ。
先ほど弓矢を投影したときに気づいたが、回路にかかる負担が軽い。
魔術回路の数は変わっていないが、一本辺りに流せる魔力量が上がってるみたいだ。
まだ宝具を投影していないから正確なことはわからないが、負担はかなり減っているはずだ。
流石に”彼女”の剣を投影するのは無理だろうが今までだったら命懸けで投影するような、かなり高位の宝具でも今なら問題なく行えるかもしれない。
あと魔力が増えたことで俺の切り札を使用できる”かもしれない”。
魔力が足りているのに”かもしれない”と言ったのは、まだこの世

界のことを良く分かっていないからだ。
俺の力が世界からどのような影響を受けるかわからないからな。宝具もどのような影響を受けるかわからない。
早めに一度確認して置いたほうがいいな。もしも戦闘で使えませんでした・・・では、命に関わるし洒落にならない。

あともう一つ俺の身体についてだ。傷の治りが異常に早かった。
確かに身体に魔力を通して新陳代謝を高めたとしても治りが早すぎる。異常だ。
流石に”彼女”の鞘を持っているときとまでいかなくても、治りがはやい。

だいいち”彼女”の鞘は聖杯戦争の時に返したはずだ。事実、最初に自分の身体を解析した時には感じられなかった。
もしかしたらこの世界に満ちるマナが関係しているのだろうか。明らかに俺の居た世界よりマナが濃い。
今のところこれぐらいしか思いつかないな。後はこの指輪が関係しているかだな———

あっ・・・指輪というのは俺の右手の中指に嵌っているものだ。どうやらこの世界に居た時から着けていたらしい。
外見は至ってシンプルなシルバーのリングに、アクセントとしてそのリングをなぞるように等間隔に六つほど、黒色の小さな黒曜石らしきものが埋まっている。
風呂に入るときに外そうと思ったが、何故か外れず、諦めて解析してみたが解析もできなかった。
俺は解析できないことに驚愕した。自惚れるつもりはないが、俺は宝具すら解析できるのだ。
その自分ができなかったということは考えらるのは四つ。

1、生き物

2、意思ある魔具

3、解析できないほどの高位の宝具、又は宝具以上の存在

4、世界の理外の存在

1、はまずない。2、は可能性として高いが構成材質すら解析できないので除外していいだろう。
3、4、は可能性は高いが、3、はともかく4、は絶対に認められないだろう。
そんなものが本当に存在したらどんだけ恐ろしいだろうか。
なんて言ったって世界の”理”が通じないということになる可能性が高いのだから。
何考えてるんだ俺は、馬鹿馬鹿しい考えだな。今の現状に少しネガティブになってるみたいだ。

するとやはり3、か・・・これが宝具、又は宝具以上の存在には見えないんだけどな。
全然神秘も感じれないし。とにかくこの指輪に関しては気をつけておくに越したことはないだろう。

「お待たせしました、士郎さん。すぐに料理の仕上げしちゃいますね」

ちょうどリリカが上がってきたようだ。かなりの時間考えに没頭していたみたいだ。

「ああ、楽しみにしているよ」
風呂上りの女の子はやはり印象がかわるな。
風呂に入るまでは髪を後ろで一つに纏めてポニーテイルにしていたのに、今は後ろに流しているだけだ。
こっちのほうが少し大人っぽい印象を受けるな。

「お待たせしました」

「ありがとう、せめて運ぶのくらいは手伝わせてくれ」
ここだけは譲れないからな。リリカは俺の表情から何か読み取ったのか、少し悩んだ後あっさり頷いてくれた。

「では、どうぞ♪」

「では、”いただきます”」

俺が”いただきます”と言ったら、リリカがすごく不思議そうな表情をしていた。
ああ、ここの世界には”いただきます”の習慣がないんだな。つい、何時もの習慣でやってしまった。

「その言葉は、なんですか？」

「この、言葉は俺の国で食事を作った人と食材を作った人への感謝を表す言葉なんだよ」

「へぇ～素敵な言葉ですね。ワタシも使っていいですか？」

「もちろんだ。では――」

「「いただきます」」

言った後、俺もリリカも笑顔になる。

「あっ、まずはこれを食べてみてください。すご～く自信作なんですよ♪」

「わかった、・・・・・・おっ、美味しいな。初めて食べた味だけどすごく良い味が出てる。これはなんて食材なんだ？」

「それは、”ネフテ”です。ここの村の特産品なんですよ」

リリカはすごく気分がよさそうだ。村の特産を褒められて嬉しいのだろう。

「ん～じゃあ、これは――――」

「それはですね――――」

こうしてしばらく料理談義が続いた。

剣の世界1（後書き）

今の所一つを書き上げるのがだいたい3～5時間ほどかかっています。
なれないことするのは、やはりたいへんですね。
自分自身あまり文才ないんで。
とりあえず週2本を目標に頑張っていきます。
あとオリキャラのリリカですが、あまり本文に特徴を書いてなかったので想像しにくいと思うので、少し補足します。たぶん次話あたりに特徴書くつもりですがまだわからないので。
イメージとしては”魔法少女リリカルなのは”の『なのは』をポニテにして瞳の色がブラウンにしたぐらに思ってください。
なぜポニテなのかは、完全に作者の趣味です。
イメージ壊してしまったらごめんなさい。

長くなりましたが次話で少しだけ物語が動き出す所までいきます。
（あくまで予定です）
では、次回もお読みいただけたら幸いです。では。

剣の世界2（前書き）

なんとか約束通りに今日中に3話目上げることができました。

結構頭がいっぱいいっぱいです。

一応構想は終わりまで練ってありますが、文章に起こすのが一苦労です・・・

あと読んで頂いた皆様ありがとうございます。
これからも読んで頂けるよう頑張っていきます。

剣の世界2

〈〈士郎〉〉

食事も一段落つき、今はリリカに入れてもらったお茶をのんでいる。
このお茶、緑茶と中国茶の中間のようなものでとても味わい深い。
名は『トート』というらしい。
こう、元の世界に無いものが次々に出てくると、俺の中の料理人としての部分が刺激される。
是非この世界の食材で調理したいものだ。

「そういえば、士郎さんは森で迷ってたって聞きましたけど、どこからきたんですか？」

そういえばそこら辺なにも話してなかったな。馬鹿正直に答えるわけにも行かないし、どう答えるか。
先のことばかり考えて、目先のことを全然考えていなかったな。

「ん～ずっと東の方の国かな。でもリリカに会えて良かったよ。あのままならまだ暫く迷っていただろうし」

とりあえず適当に答えて話題を逸らすことにした。ちょっと卑怯だったかな・・・

「ワタシこそ士郎さんがいなきゃ危ない所でした・・・改めてありがどうございます」

そう言ってリリカは真面目な顔で頭を軽く下げる。
改めて礼をいうなんて礼儀正しい子だな。ふと・・・なんとなく桜と面影が重った。
別に外見が似ているわけじゃないんだけどな・・・なんというか雰囲気が似ているのかな。
そういえば今頃桜はどうしているだろうか?最後に家に戻ったのは正月だから、半年ほど会ってないのか。
思えば桜には世話になりっぱなしだった気がする。

「気にしないでくれ。困ってる人がいたら助けるのは当たり前だって言っただろう」

「それでもです。ワタシがちゃんと伝えたかったんです」

前も思ったけどリリカは、意思が強いというか、少し頑固な所があるな・・・
自分が言ったことは必ず貫き通すかんじだ。
ここでまた否定したら永遠に押し問答が続きそうだし、ここは素直に受けておくべきだな。

「そうか、素直に受け取っておくよ。それに美味しいご飯もご馳走して貰ったしな」

「えへへ・・・どういたしまして。お口に合ってよかったです。」

「そういえば、この家にはリリカしかいないのか？他の人が見えないけど」

そうなのだ。この家にお邪魔してから、リリカしか見ていない。最初は後で家族の方が帰ってくるのでは？
と考えたがその気配もない。もしもここに一人で住んでるとしたら異常だ。
まだこんな外見十歳くらいにしか見えない女の子が一人で暮らすなんて、どれだけ大変だろう。
ましてやこの世界には電気、ガス、水道もないのだ。

毎日の生活水を確保するために井戸に水を汲みにいくだけでもかなりの重労働だろう。
聞くのは無神経かと思ったが聞かずにはいられなかった。

「ここの家にはワタシ一人で住んでるんです。母は元からいないんですけど、父は前の戦争で村から出て行ったきり帰って来なくて。きっとワタシが悪い子だから嫌気がさして帰ってこないんですかね
―『そんなことはない！』―っ」

「そんなこはない、リリカはこんなに頑張っていい子じゃないか。
間違ってもそんなこと言っちゃいけない。

それに何らかの理由があって帰れないだけかもしれないだろう」

わかっている・・・こんな言葉だだの気休めにしかならないことは。きっと彼女も本当のことは分かってるはずなのだ。

なのに・・・あんなことを言うなんて。俺は酷い奴だ・・・そこに分かりきった現実がるというのに、そこから目をそらして甘い現実を口にする。

自分に吐き気がする。でもリリカのあんな表情見たら何も言わずにはいられなっかった。

まるで世界で一人ぼっちのような、そこにいるけどいないような、そんか空虚な瞳を見たら。

こんなに気丈に振舞ってはいるけど、まだ小さい女の子なのだ。本当ならまだ甘えている年頃なのだ。なのに――

「そうなんですかね・・・そうですよね、ワタシも信じてみようと思います」

そう言ってリリカは乾いた笑みを浮かべる。

「ああ、それにリリカはもうちょっと甘えていいと思う。俺の前ではもう少し甘えて欲しい」

それで少しでも彼女の心を癒すことができるなら

「そんなこと言われたら本当に甘えたくなっちゃうじゃないですか。

ワタシって本当はすごく我侭で泣き虫なんですよ」

今は喜んで彼女の我侭も弱い部分も受け止めてあげたいと思った
だってほっておけるわけがないと思ったから

「望む所だ。気がすむまで甘えたらいい」

遂にリリカの瞳から一筋の涙が流れた。俺はそっとリリカの傍に近づいて、手を頭において優しくなでてあげる。
暫く撫でていたら、リリカはダムが決壊したみたいに涙を零し、思いっきり抱きついてきた。

「な・・・なんで、お父さん帰ってこないの！必ず帰って・・・いい子にしてたら・・・帰ってくるって言ってたのに・・・・・・お父さん――」

俺はリリカが落ち着くまで黙って抱きしめ続けた。

「あ・・・あの、ありがとうございました。・・・・・・すみません、みっともない所見せてしまって」

「いいんだ、気にするな。それに俺は嬉しかったぞ」

リリカの頬が少し赤くなって俯いた。照れてるみたいだ。

少しするとリリカが意を決したように顔を上げ――

「その・・・あの・・・士郎さんのこと、お兄ちゃんって呼んでも良いですか・・・・・・」

うっ、不覚にもグラっときた。だってしょうがないだろう。こんな可愛い子に潤んだ瞳で上目使いされたら。

嫌、とは言えないだろう。

あっ、ちなみに言っとくが俺は『ロ』のつく人じゃないぞ。そこだけは要注意だ。

「ああ、いいぞ。リリカ」

「ありがとうございます・・・えへへへ」

本当に嬉しそうな表情だ。よかったと思う。

「そういば、お・・・お兄ちゃんは明日以降はどうするつもりですか？・・・もし良かったら――」

「リリカさえ良ければもう少し世話になってもいいかな？もうちょっと調べたいこともあるし・・・」

最初は直ぐにでも大きな町にでも行って、もう少し情報を集めようかと思ったけど・・・とてもじゃないけど今のリリカは放っておけない。
まあ、そんなに急がなきゃいけないわけでもないし。ここで集められるだけ集めてから他の町に行っても遅くはないだろう。
それにリリカの不安そうな表情を見たら直ぐに町を出ることなんて、出来るわけがないな。俺はそこまで薄情じゃないつもりだ。

「はいっ♪・・・勿論です」

この向日葵のような笑顔を見て、俺のとった行動は間違いではなかったと思いたい。

〈〈リリカ〉〉

本当に不思議な人だ。まだ今日会ったばかりなのに・・・とてもそんな感じがしない。

親がいない理由なんてもっといくらでも上手い誤魔化し方があっただろうに。
何故か気がついたら・・・本当のことを言っていた。そして考えてもいないことを口にしていた。

ワタシだってそこまで子供じゃない、戦争に行って帰ってこないのがどういいことかくらい分かっている。
なのに、あんなことを行ってしまった。
でもお兄ちゃんは話を合わせ、そして否定してくれた。ワタシは悪い子じゃないって・・・
お父さんが帰ってくるなんてことはないとお兄ちゃんも分かってるはずだ。あれは優しい嘘なんだと思う。
だぶんお兄ちゃん以外の人に言われたら、怒りを感じていたと思う。

でもお兄ちゃんの目を見てると何故かスッと受け入れられる。
あの目を見てると遂自分の弱い部分をみせてしまう。
挙句にあんなに大泣きして・・・あんなに泣いたのは何時以来だろう？
少なくともお父さんが出て行ってからは一度も泣いていない。
だっていい子にしてないと帰ってきてくれないと思ったから。

だけど今日のおかげで自分の中でなにか区切りがついた気がする。
これもお兄ちゃんのおかげだ。

でも不安なこともある・・・
お兄ちゃんは何時か絶対にこの村から出て行くだろう。残ってくるなんてことはないと何故か断言できる。

断言できるのは、やはりお兄ちゃんが時々見せる遠くを見てる瞳のせいだろう。
こちらを見てるようで、何処か遠くを見てる瞳。
いつかお兄ちゃんはその遠くに帰ってしまうんだろうって気がしている。

その時ワタシは耐えられるだろうか・・・・・わからない。
まだお兄ちゃんは居てくれるみたいだしその間に考えてみよう。

〈〈士郎〉〉

今俺は家の裏で薪を割っている。
なんだかんだ時間が経つのは早いもので、リリカの家に居候してから2週間近くがたっていた。
ここでの暮らしにも大分馴染めてきたと思う。最初は村の人も警戒していたが今では気軽に挨拶をしてくれるようになった。
リリカとの生活も概ね順調で、なんだかんだ楽しくやっている。

最初は食材の違いなどで料理は断念していたのだが、1週間ほどで味の感覚が掴めて来たのでリリカに頼み込んで何とか作らせて貰った。
あの時のリリカの表情は今でも忘れられない。それからは1日おきに交互でご飯を作るようになった。

味は？それは結果が物語っているだろう。

あとリリカが起きる前に掃除、洗濯を終わらせたら怒られるなんて事件があった。
あのときはご機嫌を取るのに苦労した・・・なんでさ。
その日から明確な家事分担表ができてしまった。最初は不満だったが、リリカの無言の威圧感に負けてしまった。

十歳に負ける俺って・・・
よく考えれば周りにいた女に勝てたことなんてなかったな俺は・・・
・・・はは・・・

それとリリカの年齢は外見通り十歳らしい、正確にはもう直ぐ十一歳になるみたいだ。
何かプレゼントも考えておかなければいけないかな。
あと俺の年齢を教えた時も驚いていた。二十歳だと教えたら十六ぐらいにしか見えないと言われた・・・そんなに童顔なんだろうか。
ちょっとショックだ。

っと、思い出に浸ってたらリリカがこっちに来たようだ。

「どうした、リリカ？」

「お兄ちゃん、ワタシこれから森に果物取りに行ってきますね」

「まった、俺も一緒にいくぞ」

「一人でも大丈夫ですよ。そんなに遠くには行きませんし」

「前みたいに野犬に襲われたら大変だろう？俺の方も薪割り終ったから一緒に行こう」

リリカは少し悩んでたみたいだが「わかりました、家の中で準備してまってますね」と返事して家の中に戻っていったみたいだ。

早く片付けきゃな、あまり待たせるわけにはいかない。

なぜ俺がこんなに心配しているかと言うと、完全に親バカを発揮しているわけではない。ちょっとぐらいあるかもしれないが・・・

それはさて置き。不穏な話をこの前、村に来た行商人に聞いたからだ。

なんでも近くの村がグルン・ドラス軍の襲撃を受けたらしい。

その村はレジスタンス（旧アイギア派）を匿っていたとかで、そのせいで襲撃されたとの話だ。

生存者が一人も残らないような凄惨なものだったと聞いている。

この時代の情報伝達など、あまり宛には出来ないが用心しとくにこしたこたはないだろう。

それに今朝起きた時から妙な胸騒ぎもする。

俺のこういう時の感は大概当たらなくていいのに当たったりする。

何も起こらなければいいが・・・

俺は今日割った薪を納屋に仕舞い、足早に家に向かった。

「待たせたな、行こうか」

「はい、じゃあ行きましょうか」

俺たちは村の外れの森に向かって歩き出した。

途中近所の人に「今日も夫婦で仲がいいね～」なんて言われたがシカトする。

最近はこんな風にからかわれることも多い。

てか、リリカなんでそんなに赤くなってるんだ？風邪でも引いたかな？

風邪かと聞いたら「違います！！」と怒られてしまった。なんでさ・・・

――――今日は結構の収穫だった。これで暫く果物には困らないだろう。

リリカも沢山取れたためご機嫌だ。

「もう日が暮れかけて来てるしそろそろ帰るか？こんだけとれれば充分だろ」

「そうですね、帰りましょうか――――あれ、何かあっちの方明るくないですか？あっちって村の方角ですよね」

「んっ！！――――あれは・・・・」

自然と俺の眉間に皺が寄る。あの明かりは・・・・日の明かりじゃない火のあかりだ。
嫌な予感がどんどん湧き上ってくる。
あっちは村の方角でそして日ではなく火の明かり。考えられることなんて一つしかないじゃないか！

”村が燃えている”

火災ならまだいいが・・・・俺の頭によぎるのはこの前の行商人の話だ。

グルン・ドラスの襲撃

この言葉が頭から離れない。

速くあそこに向かわねば・・・・

焦りばかりが先に行く

「リリカはここで待ってろ！」

「え！？ちょっ、おに――――」

俺は最後までリリカの返事を聞かずに駆け出す。

心の中でいつもの言葉を呟きながら・・・（トレース・オン）と――

剣の世界2（後書き）

次回はやっと聖なるのキャラが出てきます（予定）
そこまで書けたらいいのですがまだ分からない状態です。

この後は少し間隔をあけて水曜、遅くとも土曜にはあげます。
そこら辺は仕事の折り合いを見ないとちょっと分からないです。

拙い文書ですが、これからも呼んでいただけたら幸いです。ではでは。

剣の世界3（前書き）

昼休み中に会社から投稿。
疲れた。

ようやく4話目あがりました。これがで来たの昨日の夜中でした。
今回初めての戦闘シーンですが、なかなか上手く書けません。
意味が理解できなかったり、楽しめなかったら、私の実力不足ですね。

あと補足です
〈〈???〉〉と表記するときは、これは第三者視点なんで、誰の視点でもありません。

剣の世界3

〈〈？？？〉〉

ある、日が暮れかけた頃。静寂が満ちる一室。
あまりにも静かすぎるそこは、まるで世界がそこだけのような錯覚をあたえる。
その中でただ一つ紙ずれの音だけが聞こえる。
音の元はこの部屋でただ一人の人物だ。

窓際に置かれた机に向かって座る一人の少女。
書物のページを捲る音だけが部屋に響く。
まるでその音は予定調和のごとく等間隔で、静寂に波をうつ。

だが、その静寂は唐突に崩された。もう一つの音によって。
（トン、トン）
二度ほど木の扉を打つ音が聞こえる。

「失礼します、カティマ」

低く、重くはないが、堅い声が部屋に響く。滑舌の良いその声は軍人又は武人のような印象を与える。
その声から一泊の間を置いて扉を開く音が響く。

「どうしたんですか、クロムェイ」

クロムウェイと呼ばれた人物は、部屋の中ほどまで入ってくると少女に一礼してから声をかける。
その言葉は親しさを感じさせるが、表情と同様で若干硬い。

「先ほど斥候からの報告で”鉾”が2小隊ここから北西１０?の村に向かって進軍中とのことです。
斥候が戻るまでの時間を考えるとあまり時間に猶予はないかと」

クロムウェイは淡々と事務的に結果のみを報告する。
それを聞いた少女は一瞬動揺したような気配を感じさせるが、直ぐに落ち着く。
少しだけ考えるような素振りを見せた後に言葉を紡ぐ。

「・・・・・わかりました、直ぐに救援に向かいます。私が先行します。クロムウェイは部隊の準備が整い次第、後を追ってきてください」

今まで表情ひとつ崩さなかったクロムエウィは、眉間に皺を寄せここで初めて崩す。

「いくらなんでも、カティマ一人では危険では。せめてこちらの部隊が整ってから『クロムウェイ――』・・・」

クロムウェイは心底”小女”カティマを案じての言葉だったが、それをカティマが遮る。

「村の人たちは、今虐げられているのです。そんな猶予はありません」

静かな言葉だが確かに強い意志を感じさせる言葉。その言葉でクロムウェイも諦めたようだ。
彼女がこうと言ったら絶対に意見が覆らないことを長い付き合いで知っているからだ。

「わかりました。ですがくれぐれも無茶はなさらないように」

「ええ」

こうは言うがクロムウェイもわかっている。この少女が無茶をしないわけがないと。
だから自分は彼女が無茶をしても大丈夫なように、最善を尽くすだけだよ。

二人は無言で部屋を出て行く。それぞれのすべき事のために。

〈〈士郎〉〉

息が荒い、胸が苦しい、血液が脳に逆流しているかのように頭がし

びれる。

思いつく言葉はこれだけ、

なんだこれは・・・なんだこれは・・・なんだこれは、なんだこれは！！

自分が今冷静でないのは分かってる。戦いでは冷静にならなきゃいけないのも分かってる。
頭では分かっても”心”がいうこと聞いてくれない。

充満する血の匂い。人間（ニク）が焼けた匂い。動かない骸。そこらじゅうから漂う死の気配。燃えて崩れる家屋。

俺が村に着いて最初に目にしたものはそれだった。

動かなくなった物の中には、村を出る前に声を掛けてくれた物もいた。

毎日挨拶を交わしてくれた物もいた。

リリカと一緒に遊んでいた小さな子供もいた。

俺の奥歯から鈍い音がする

口の中が鉄の味がする

唇から血が零れる

だが、そんな物気にならない

俺の心を占めるのは一つだけ

――――”怒り”――――

こころの内から沸きあがってくる、際限なんかないように

身体が熱い、血が沸騰しそうだ

俺が俺でなくなりそうだ。

敵の三人がこちらに気づいたようだ

ちょうどいい・・・この怒りをぶつけられる。

俺の意識は敵を殺すことのみ集中する。

「投影、開始〈トレース・オン〉」

俺は全ての魔術回路に撃鉄を落とす。

魔術回路に、魔力が溢れる。

全身が軽く痺れるが気にしない。

全ての回路に設計図を待機させる。

全身を魔力で限界まで強化する。

手には使い慣れた、あの赤い弓兵が愛用していた夫婦剣。

敵の3人のうちの一人が人間離れした速さで近づいてくる。

だが俺には驚きも何もなかった。

あの速さの動きですら、遅く見える。

きっとあの動きは、サーヴァントクラス並だろう。

手には一振りの長剣を持ち、まるで木の枝でも振るかの様に何の業もなく上から下に。

俺を真っ二つにしようと振り下ろしてきた。

あれを食らえば俺は一溜まりもないだろう・・・・・だが恐怖はない。

半身になり半歩右に移動するだけで余裕でかわす

相手の勢いを殺さずに、左手に持つ黒い色の短剣”干将”で胴を薙ぐ

それだけで相手は胴を真っ二つになり血を撒き散らしながら、金色の霧になって跡形もなく消える。

人を切ったというのに何も感じない

人が消えたのに、なんとも思わない

今の俺の動きが異常だということも、今の俺は気づかない。

俺をただの人間ではないと認識したのか、残りの二人が一斉に襲い掛かってくる。

一人はその場に留まり何やら呟いている。もう一人はその瞳に意思を写さずこちらに走り寄ってくる。

こちらに近づいてくる敵に右の白い色の短剣”莫耶”を投げる。

避けられる、だが構わない。投げると同時に俺も走り出す。

走り寄ってきた敵はハルバードのような武器を左から右に薙いでくる。

それをさらに腰を落とし、体制を低くし地面とほぼ平行に走ることでかわし、すれ違い様に”干将”を左下から右上に振り上げる。

そのまま金色の光を放ちながら消えていく。確認すらせず、そのままま残りの敵に走る。

残りの一人は何かを呟きながらバックスッテップで下がり、一回黙りそしてまた何かを呟こうとした時

その言葉が紡がれることは永遠になかった。

その胸から白い剣が生えているから・・・。

投擲した”莫耶”が手に持つ”干将”惹かれるようにして敵の背後から戻って来たためだ。

その結果、敵は背中から胸に掛けて貫かれ、初めから存在していなかったかのように消えていく。

身体の内から暗い気持ちが湧き上がってくる。・・・・・・心が黒く染め上げられる。

まるで与えられた大きな力に酔ってるかのようだ。事実これは俺の力ではないのだろう。

さっきから右手の中指が熱く、そこから全身にかけて熱い物が送られてくるのを感じる。

これは、魔力とかそんなんじゃない。まるで、・・・そう。”力”この表現が一番あってる気がする。

こちらに気配が集まっているのを感じる。そちらに視線を向ければ、そこからさっきの三人とまったく同じ顔の物が現れる。

数は6、その瞳はいずれも暗く濁って意思を感じられない。

6人は俺を中心に半円を描くように位置取り、二人は残り、四人がこちらに向かってくる。

俺は回路の設計図を解放する。

「停止解凍、全投影連続層写（フリーズアウト。ソードバレルフル

オープン）」

一呼吸の間に６人の敵は霧に帰っていた。残っているのは地面に突き立つ２４本の無名の名剣のみ。

その剣も次第に最初から無かったみたいに消える。

俺はまだ敵はいないかと探していたが――――

「キャァァァ――――！！」

一瞬でそちらに意識を向ける。

そこには、膝に力が入らないのか尻餅をつき怯て後ずさるリリカとそこに歩きながらゆっくり近づくもう一人の人がいた。

いやあれは、人じゃない。人の形をした人ならざるものだ。

そこで俺は初めて意思を取り戻した。頭から冷や水を浴びせられたように覚めていく。

それと同時に身体から力が抜けていく。いままでの力が嘘のように消えていく。

すぐにリリカの元に駆けようとするが、その進路上にもう二体の敵が現れ、進路を塞ぐ。

（まずい、マズイ、拙い）

俺の心に浮かぶのは焦りばかりだ

このままでは間に合わない。

なら間に合うようにすればいい。

俺はそのまま敵を無視して進む。

――身体が重い

すれ違い様に切られる。

まともに避けることすらできない。

右腕が切られた――大丈夫。右腕は動かないが、まだ左腕がある

背中を切られた――大丈夫。致命傷じゃないし、走るのに問題ない

俺と相手まで、後十歩の距離

リリカと相手まで五歩の距離

この時になって相手はようやく、リリカより俺のほうを脅威と感じたみたく足を止め迎え撃つ。

俺は左に残る”干渉”投擲する。

容易く防がれる。

構わない。そのまま敵に向かって身体ごとぶつかりに行く。

相手はまだ完全に剣を戻しきっていない。

「うぁぁぁぁぁぁーーーーー！！」

俺は声を上げながら、右肩から相手に突っ込む。

相手は５ｍほど飛ばされる。そして直ぐに起き上が――――らず徐々に金色の霧になりながら消えていく。

胸に短剣を残しながら。

良かった・・・上手くいって。あの時少しでも相手が剣を戻すのが速かったら串刺しになっていたのは俺だろう。
咄嗟に左手に短剣を投影したのはいいけど・・・・・博打だな。

すぐさまリリカの傍に行きたいが――――そうも行かないみたいだしな。

進路を塞いでいた残りの二体がこちらに向かってくる。

一体目の攻撃を右に飛んでかろうじて避ける。

だが二体目の攻撃が避けたとこに飛んでくる。

咄嗟に左手に名も無い細身の長剣を投影し、防ぐが

力に勝てずに弾かれる。

（ヤバイ！！）

そう思ったときには、すでに腹部に鈍い衝撃を感じる。

蹴り飛ばされ何処かの壁に叩きつけられたようだ。

背中にも衝撃を感じる。

意識が落ちかける。アバラが何本か折れたみたいだ。なにより出血が拙い。

このままではあと半刻しない内に命を落とすだろう。

だがまだ―――（意識を失う訳にはいかない！！）

遠くからは「お兄ちゃん！！」と聞こえるが、本当に聞こえているのかも怪しい。

（守らなきゃ・・・）

（リリカだけは守らなきゃ・・・）

まだ、立てる。辛うじて左腕も動く。

（なら、いける。まだ俺は何も成していないじゃないか！！）

視界に二つの影が迫って来てるのがわかる。

視界はぼやけてるが問題ない。

だが、唐突に一つの影が消えた。

代わりに新たな影が俺の目の前に立つ。

綺麗な金髪を靡かせ一振りの剣を携えて。

その新たな影は瞬く間にもう一つの影を切り捨てる。

その太刀筋はイヤでも思い出させる”彼女”を――――

「セ・・イ・・・バ・・・・・・ァ――――」

気を抜いたのがいけなかった。意識を保つことが出来ずに、俺はそのまま暗闇に堕ちた。

剣の世界３（後書き）

ついにカティマさん出てきました。

当初の予定では剣の世界編は１０話前後で終わられる予定でしたが、このままでは２０話近くなりそうです。
どこかで内容削っていくしかないかと悩んでます。
あんまり長くなると読むほうにも書くほうにも飽きがきそうですしね。

それでは最後にいつも通り
この作品を読んでくださった皆様ありがとうございます。では、では。

剣の世界４（前書き）

投稿する気がなかったのですが、風邪でダウンして暇なので一話でけ、投稿。　現在ストック作るために一日一話づつ書いていたのですか。
無理しすぎたようです反省。
あとお詫びです。前回の内容を少し修正させていただきました。
４小隊→２小隊と変更させていただきました。
これは私が小隊の意味を良く理解していなかったからです。
この作品では１部隊三人、１小隊は４部隊の計１２人とさせてもらいます。
今回少し短めですが、次回からはこのくらいの量でいかせてもらいます。

剣の世界４

〈〈カティマ〉〉

私は今全力で森の中を走っている。

”鉾”が向ったという村まであと１ｋｍ程。

かなりの距離を走っているが息の乱れは無い。

だけどその足は唐突に止まった。

いや・・・止めざるえなかった。

左右から”鉾”が三体ずつ徐々にこちらに向ってきている。

速く村に行きたいが、無視はできない。

このままでは左右から挟撃されてしまう。それは、あまり得策ではない。

私の永遠神剣『神心(しんしん)』から感じられる現在の”鉾”の気配は全部で２４。情報通りの数だ。

のち、約半数は既に村に辿り着いていると思われる。

ここで挟撃されては予想以上の時間を取られてしまう可能性が高い。

私は少しの間思考した後、各個殲滅を決める。

決めたら後は動くだけ。

気配から右の敵のほうが若干近い。

迷わず私は右に向って駆ける。

１０秒もしない内に私の視界に三体の敵を捉える。

更に足に力を入れ、地面を強く蹴り、スピードを上げる。

一瞬のうちに敵の懐に入り、勢いを殺さず手に持つ剣『心神』を掛け声と共に縦に振り下ろす。

「はあああああっ！」

敵は何も反応できずに頭から股まで裂け、光となって消えていく。

もう一体が、振り下ろしのタイミングを狙って、切りかかってくるが、それより速く大剣を横に薙ぐ。

それだけで敵は消滅する。

残り一体が左から迫ってくる部隊に合流しようと走り出すが、相手が走る速さより速く背中を切りつける。

残り三つ・・・

光の粒子となって消える直前に敵の三体がこちらを捉え、向ってくる。

こちらに向って来るより速く予め唱えて置いた神剣魔法を手を前に突き出し開放する。

「テラー！！」

敵の一体が黒い光に包まれ動きに隙ができる。

”テラー”は私が使える神剣魔法で相手に強い恐怖を与えることでつけこむ隙を強引に作り出す魔法である。

私はその隙を逃すことなく、怯んだ一体を切り伏せる。後は陣形の崩れた二対を瞬く間に消し去る。

「速く村へ――――」

喋り終える前に走りだす。

その速さは先ほど走っていたよりも速さが上がっている。

普通の人間では視認するのも難しいだろう。

途中、残りの”鉾”六体と対峙するが難なく殲滅する。

残りは１２・・・いや、１３？

”鉾”とは別の神剣の気配を感じる。

それも禍々しいまでの気配を・・・・・・

不覚にも全身に鳥肌が立つ。

（――嫌な予感がする――）

村まで残り６００ｍ弱。

ここからでも村が燃えているのがはっきり分かる。

私なら３０秒もあれば余裕でつける。急がなければ。

焦る気持ちを落ち着け。走り出す。

しかし走り出して数秒もしない内に異変が起きた。

”鉾”の気配が続けて三つ減る。

何者かは分からないが、”鉾”と戦っているようだ。

こちらの味方だと思いたいが油断できない。

先ほど感じた禍々しい気配が私の心の中で気を許してはいけないと訴えかけている。

手にした『心神』からも同様の意思が伝わってくる。

「アイギアス・・・」

手に持つ神剣を見つめながら不安を押さえ込む様に無意識に自身の守護神獣の名を呟く。

今はそんなこと考えてる場合ではない。

とりあえず自分の中にある不安を押し殺しながら、村に駆ける。

「なあっ！！」

次の瞬間私の顔は驚きで一杯になる。

一瞬で”鉾”の気配が同時に６つ消えたのである。

信じられなかった。確かに６体の”鉾”を倒すのは神剣使いなら、そんなに難しくないだろう。

だが同時と言われれば話は変わる。

私に同じことができるかと言われれば、首を横に振るだろう。

いずれにしろあの村に居る神剣使いは、相当の手だれ。もしくは広範囲の攻撃ができるのであろう。

私はより一層警戒を強める。敵の敵が味方とは限らない。

もし敵だった場合は相当の覚悟が必要だ。

こちらもただではすまないだろう。

村の入り口までもうすぐ。

そのとき村の反対側から少女の叫び声が聞こえた。

良かったまだ生き残りがいる。

私は少しだけ希望を見出すと自分の剣に語りかける。

「『神心』、お願い。力を貸して」

すると今まで以上に剣から力が送られ、全身に力が漲って来る。

全力で悲鳴が聞こえたところまで走る。

だが唐突に先ほどまで感じた、禍々しいまでの神剣の気配が消える。

（何故？）疑問に思うが、今は何より少女を救うことが優先だ。

今現在も”鉾”の気配を3つ、いや・・・2つに減ったのを感じる。

急がなければ少女が危ない。

そして村に入り私が眼にしたのは――――

”鉾”に蹴り飛ばされ、壁に叩きつけらた青年と、「お兄ちゃん！！」と叫ぶ少女だった。

（いけない！！）

私は限界まで足に力を入れ、全力で駆ける。

赤・・・いや、赤というよりオレンジに近い色の髪をした青年が左腕で腹部を押さえながらフラフラと立ち上がる。

良く見ると右腕は切られ、背中も出血していることから怪我しているのだろう。

”鉾”に蹴られたのだ。腹部も良くて肋骨の骨折、最悪内臓ま遣られているだろう。

人の形をしているが、あれは人とは全く別なのだ。それを言えば神剣使いもたいして違いはないのかもしれない。

良く立ち上がれるものだ。普通なら意識を失っていてもおかしくはない。

その気力に少しだけ感心してしまったほどだ。

決して軽くは無い怪我だ。速く治療しなけらば命に関わる。

敵の”鉾”が青年に襲い掛かる前に私は注意をこちらに逸らす意味合いも含めて声を上げながら近くの敵に横から切りかかる。

「やあああああ！！」

敵の一体がくずれる。そして身体を青年と”鉾”の間にいれる。

もう一体が動きを見せるより速く、横に剣を払い消滅させる。

その時後ろの青年が何かを呟いたが良く聞こえなかった。

気にせず回りに気を配り、警戒する。

周囲一帯に敵の気配は無いようだ。

少しだけ警戒を解き、息を吐き呼吸を落ち着かせる。

「はぁぁぁぁぁぁ――――」

後ろの青年は意識を失って倒れたようだ。

速く治療をしたいが、少女のほうも気になる。

少女のほうを見ると、足に力が入らないのか「おにいちゃん・・・」と何度も呟きながら四つん這いになって青年の所に向っている。

かなり取り乱しているようだ、このままでは少女が何をするかわからない。

しかたなく先ずは少女を落ち着かせることを決断する。

私は少女の前まで行き、片膝をついてしゃがみこみ彼女に目線を合

わせながら話しかける。

「安心してください。あなたのお兄さんは私が必ず助けます」

その言葉に少女は顔中を涙で濡らしながら、必死に声をかけてくる。

「お兄ちゃんを、お兄ちゃんを助けて・・・・・・あのままじゃ死んじゃう！！」

私は少女を落ち着かせるように、静かにしかし少し強めに語りかける。

「絶対に助けます。ですから落ち着いてください」

少しの間、少女と目をあわせる。

少女は納得したのか無言で首を縦に振ってくれた。

「あなたは、とりあえずお兄さんの傍にいてあげてください。私は応急処置をするために縛る物を探してきます。
後で私の仲間が来ますから、そしたらちゃんとした処置が出来ます」

私は安心させるように、ゆっくり少女に語りかける。

少女は理解してくれたようで、一度だけ頷くと青年のもとに向っていく。

それを確認して私も自分のするべき事に集中する。

燃え盛る景色の中、それが不思議な青年と小さな少女との初めての出会いだった。

クロムウェイ達後続の部隊が来たのはそれから半刻ほど後だった。

〈〈???〉〉〉

とある何も無い空間、そこにあるのは闇だけ。

だがその空間に二つの影だけが在る。

「イレギュラーが”アレ”と接触してしまったみたいだがどうするんだ？まさかこれも計画のうちか・・・」

影の一つが嘲りを含めてもう一つの影に語りかける。

もう一つの影が不機嫌そうに答える。

「うっさいわね・・・でも計画には何の問題もないでしょ。それに保険もかけてあるのだから。そもそもあんたが”ポカ”やらかすからでしょ！おかげで目標との接触もできていないじゃない。そこらへんは手を打っているんでしょうね？」

先ほどの影がうんざりした顔で答える。

「ああ、それはもちろん。じきに合流させるさ。少しばかりプランが遠回りになったに過ぎない」

「そう、今度は”ポカ”するんじゃないわよ・・・これ以上の遅延はごめんだからね」

そう憮然と言い放つ。もう一つの影は気にした風も無く、ただ「ああ」とだけ答え姿を消す。

「ふん・・・」

もうひとつの影もその言葉だけを残し消える。

その場に不穏な空気だけを残して。

剣の世界４（後書き）

カティマさんの回です。こんなのカティマじゃないと言う人がいたらごめんなさい。
とりあえず現段階ではカティマさんは村にいた神剣使いが誰か？というのは分かっていません。

あと神剣魔法を出してみましたが当初の予定では”メディション”でしたけど、やはりこの段階で覚えてるのはおかしいですよね。たしか一番最後に覚えた気がするんですよね。というわけで投稿前に”テラー”に変更させてもらいました。
魔法は出さないほうがよかったですかね？
そこらへんは皆さんの意見を見ながら考えていきます。
何もなければちょく、ちょく出すかもです。

長くなりましたが、このまま行けば後３，４話ほどで望む達は合流できそうです。
後次の投稿は予定通りに土曜にするつもりです。

では最後に読んでくださった皆様ありがとうございます。では、では。

剣の世界5

〈〈士郎〉〉

黒い太陽、一面の焼け野原。

建物は原型を留めず、唯の瓦礫の山。

黒くなった人だった物。

ここで生きているのは自分だけ。

生きているからには生きないとダメだを思った。

それでも希望なんて持てなかった。

赤い世界という名の地獄。

助からないと思った。

この赤い世界からは誰も逃れられないと。

それでも俺は助かった。

一人の男の奇跡によって。

ここで俺は新たに生を受けた。

目を開けると自分の視界に写ったのは見知らぬ天井だった。

一番初めに出た言葉は

「久しぶりに見たな・・・・・・」

この言葉だった。一言呟いてから、急に現実感が湧き上がってくる。

自分は今ベッドに寝かされているようだ。

リリカのことを考えたが、今の自分の現状と倒れる前の記憶を照らし合わせると無事だと思った。

そして思い出す。自分が倒れる直前に見たものを。

俺は”彼女”を見た気がしたが、すぐさま頭の中で否定する。

”彼女”がここにいるわけがない。

だがそれでも少しだけ淡い期待を抱いてしまう。

そんな自分を情けなく思う。

俺はまだ”彼女”に縋っているのか。

こんなんじゃ、まだまだ『正義の味方』になんかなれそうにない。

思い出す”彼女”との約束を。

”彼女”に追いついて見せると誓ったあの誓いを。

胸が少し軋む・・・・・・だが大丈夫だ。

俺は思考を止め、体を起こそうと思うが腹部に走る激痛と全身のダルさからそのまま起き上がることなく倒れてしまう。

とりあえず、自分の体の現状を調べることにする。

心の中で「解析、開始（トレース・オン）」と呟く。

魔術回路、２７本正常稼動

魔力貯蔵量、ほぼ全快

肉体の損傷、右腕の傷は塞がったが動かせるまで３日程必要

背中の傷、問題なし

腹部の怪我、内臓の損傷は完治、しかし骨折は完治までまだ時間をようする

全身に筋肉の過負荷による断裂もみられる、こちらも少し時間がかかる。

俺は自分の身体に少しだけ驚く。

確かにあの時の自分はサーヴァント並みの力を使っていたはずだ。

なのに外傷を除けば、筋断裂だけですんでいる。

魔術回路も正常だ。

あの力は今の自分には過ぎた力なだけに、その驚きも一入(ひとしお)だ

あの力はやはり外的要因があると考えるのが普通だろう。

俺は”世界”と契約したわけではないし・・・

考えられるのは自分の右手にある指輪だけ。

しかし分からない事だらけだ。

この指輪にそれほどの力があるとは思えない。

仮に指輪の力だとして何故あの時に発動して、唐突に止まったのか。

そしてその時に感じた、自分以外の意思。

まるで内側から塗りつぶされていくような感覚。

正直少し怖くなった。あの、自分が自分でなくなってしまう感覚に。

やはりこの指輪には注意が必要だ。

次に指輪の力が発現した時は強靭な意志力持たない限りは、危ないだろう。

今の俺に押さえ込める自信はない。やはり何らかの事前措置が必要だ。

俺が頭を悩ませていると部屋の外から二人の人の気配を感じる。

ノックも無しにいきなり扉が開かれた。

入って来たのは一人は見知った少女。もう一人は金色に輝く綺麗な長い髪をした少女だ。

外見年齢的には16か17といったところか。

見知った少女、リリカが声を掛けながらこちらに走りよってくる。

「お兄ちゃん！――――」

リリカの後に続きもう一人の少女がゆっくりこちらに近づいてくる。

「目覚めたのですね、気分はいかかですか？」

「ああ、大丈夫だ。ありがとう」

少女は俺の目を見ながら話しかけてくる。
俺は寝たままなのも失礼と思い起き上がろうとすると、リリカに押さえつけられた。

「リリカ・・・」

「お兄ちゃん怪我してるんだから安静にしてないとダメ！」

俺はリリカの威圧感に負けて抵抗を諦めた。その横で金髪の女性が口元に手を当てて少し笑っている。

なにが可笑しいのだろう？

「そのままで、大丈夫ですよ。あっ、申し遅れました。私はカティマ＝アイギアスと申します。貴方達二人を保護し私達の村まで運ばせてもらいました」

「そうなのか・・・助かったカティマ。改めて礼を言わせてもうよ。カティマか・・・・・実にキミに似合ったいい名だ。俺の名前は衛宮士郎、士郎って呼んでくれ」

最後に笑顔をつけるのも忘れない。カティマは若干頬が赤くなった気がする。どうしたんだろ？
そしてリリカの視線が鋭くなる・・・何かいけないこと言ったか？

「い、いえ。当然のことをしたまでです。士郎殿。気になさらないでください」

「それでも俺が感謝しているのには変わらない。だから”ありがとう”カティマ。それと殿はやめてもらえないか、落ち着かない。出来れば士郎で呼び捨てで頼む」

「そうですか？分かりました。これからは士郎と呼ばせていただきます。」

よかった、あのまま士郎殿なんて呼ばれ続けたらむず痒くてしかたない。

「あの、いくつか聞きたいことがあるんだけどいいかな？」

「ええ、答えられる範囲でしたら」

「まず、俺が倒れてから何日経ったんだ？」

「今日でちょうど五日です。リリカが目を覚まさないんじゃないかって心配してましたよ」

そんなに眠っていたのか。傷の治り具合から2，3日は経ってるとは思ったけどそんなに経ってるとは・・・・
てか、リリカを呼び捨てにしてるけどいつの間にか二人は仲良くなったみたいだな。

「そうなのか・・・リリカ心配かけてゴメンな」

「いいよ、お兄ちゃんが無事ならそれで・・・」

リリカが首を横に振りながら答える。良く見ると目もとも若干赤い。申し訳ない気持ちで一杯になると同時に、こんなに心配してくれてる人がいるのが凄く嬉しい。

「それとカティマは私達の村と言ったけど、ここはどこら辺なんだ」

「ここは士郎達がいた村から南東に１０ｋｍほどにある村です。名はヨハト村と言います」

１０ｋｍもの道のりを、怪我人の俺を運んでくれたのか、感謝しても感謝しきれないな。
そんなこと思ってる時、不意に扉をノックする音が聞こえた。

「失礼します」

その声と共に入ってきたのは長身で装飾など一切ない実用的な鎧を纏った一人の顔に傷のある男だった。
その男は部屋に入り一礼してからカティマに声をかける。

「カティマ、ちょっと・・・・・・」

そう言った後に俺とリリカのほうを見る。どうやら俺たちには聞かせられない話らしい。
カティマも一度俺たちを見た後に直ぐに男に向き直り、

「わかりました。では士郎、話の途中ですいませんがまた後で。リリカはどうしますか？」

「ワタシはまだお兄ちゃんの傍にいます」

「分かりました。起きたばかりですからあまりは無理はさせない様に。では後ほど」

そう言ってカティマと男は部屋を出て行った。
部屋には俺とリリカだけが残された。

「カティマおねぇちゃん、何かあったのかな？」

リリカが心配そうな顔をしているので俺は安心させるように「大丈夫だ、ちょっと用事が出来ただけだろ」と返す。

リリカも「そうだよね」と言い直ぐに笑顔になった。

その後リリカに俺が眠ってる四日間のことを聞いた。

なんでも俺がこの村に運ばれた時は本当に危なかったのだとか。
その後の怪我の直りの早さに先生が驚いていたとか。
ここの村の人によくして貰ったとかだ。
様々なことを聞いた。

なかでも俺を助けてくれたのがカティマだと聞いて、すんなりと納得してしまう。
最後に見た金色の髪は”彼女”ではなくカティマだったのかと。
残念なような、安心したような複雑な気持ちだ。

そんな他愛無い話をしばらくしていると眠気が襲ってくる。思わず欠伸がでる。
まだ身体が休息を必要としているようだ。
「お兄ちゃん眠いの？じゃあ眠っててて。後で代えの包帯と食事もってくるから」
どうやらリリカに気を使わせてしまったみたいだ。
「悪いなリリカ。お言葉に甘えて眠らせて貰うよ。ありがとな」
リリカは最後に「気にしないで」と言い部屋を出て行った。
まだ知りたいことや考えなきゃいけないことが沢山あるが今はとりあえず寝よう。
眠りに着いたのは直ぐ後のことだった。

剣の世界5（後書き）

あの襲撃の後のお話です。やはり士郎は天然ジゴロ？そしてリリカは某白い魔王のように成長するのでしょうか・・・

今回あまり書くこと無かったので前書きカットしました。

現在９話まで書き上げたのですが、今だ望む出てきません・・・

このままじゃ本当に剣の世界だけで２０話越えそうです。

望む達が合流したら内容を巻いたほうがいいですかね？

もしくは今の書き方を変えるかですよね。

個人視点で書いてたらなかなか内容進まないですし。

それと次の更新は明日です。

一話ごとの文章量下げたので一応定期更新できそうです。

基本土日更新で余裕があればそれ以外の曜日に不定期にもう一話という形になります。

それでは今回も読んでくだっさた皆様ありがとうございます。では、では。

剣の世界6（前書き）

このキャラおかしくない？この設定変じゃない？

なんて思うところが多々あると思いますが、ご容赦ください。

自分でも書いてて性格が原作と違うなと思ってますんで。

ちなみに今回はかなり独自考察というか独自設定が入ってきてます。

たぶんこの先もこんなのが続くと思います。

こういうのがダメでしたらここで読むのを止めておいた方がいいと思います。

調べても、あまり詳しく書いてあるサイトが見つけられないんですよね。

だからそこら辺は想像力で埋めてる感じです。

聖なるの情報で詳しく載ってるサイトなどがあれば教えて貰えれば幸いです。

前書き長くなりましたけど、ここまで読んでくださった方ありがとうございます。

剣の世界6

〈〈クロムウェイ〉〉

無意識に重い溜息を吐いてしまう。

現在我々の抱えている問題が大きいからである。

ダラバ＝ウーザ率いるグルン・ドラス軍。

その中でもダラバ直轄の精鋭部隊”鉾”

あれによりアイギア王家は手も足も出ないまま負けてしまった。

”鉾”は人間ではとても太刀打ちできない。

人間よりも圧倒的に強い力。

人間ばなれした速さ。

そしてただの人間では太刀打ち出来ない圧倒的な魔法。

例え騎士が百人いても”鉾”一人にすら敵わないだろう。

それほどまでに圧倒的な戦闘力を持っているのだ”鉾”という存在は。

私らに出来ることはこの身を犠牲にして精々時間を稼ぐこと。

そして唯一”鉾”に対抗できる存在。永遠神剣の使い手。

それもこの世界で確認されているのはたったの二人だけ。

一人は我が主君カティマ＝アイギアス。滅亡したアイギア国のアイギアス王家最後の生き残り。

そしてもう一人はダラバ＝ウーザ。敵の総大将であり、アイギアス王家に謀反を起こしアイギア国を滅亡させた張本人。

よりによって二人しかいない永遠神剣の使い手が敵にいるとは何と皮肉どろう。

せめてこちらにもう一人神剣使いがいたらアイギアス王家はここまで追い込まれなかっただろう。

牽いてはアイギア国も滅亡しなかったはずだ。これも運命だというのだろうか。

現在各地でレジスタンスを組織し抵抗を試みているが今のままではジリ貧だ。

どう頑張っても普通の人間では”鉾”には勝てない。

カティマ一人で戦い続けるのも無理があるだろう。

いくらカティマが強いといっても、多勢に無勢。

１０や２０は何とかなるとしても、その倍は厳しい。そしてそこをつけ込まれれば負けてしまうだろう。

そして確実にカティマの居場所がバレれば、”鉾”が一斉に攻めてくるだろう。

――――アイギアス王家の血縁を絶つために――――

だからレジスタンスには情報の規制を徹底させているし、カティマが王家の人間であることを知るものは私を入れて片手で数えるほどしかいない。

しかしつい数日前にこの村からそんなに遠くない村に”鉾”が攻めてきた。少数の部隊だったとはいえ、これは無視できない。

カティマがこの辺りに潜んでいると知られている可能性が高い。

この前の部隊はカティマを探しに来た、もしくは知っていて挑発しに来たのかもしれない。

ダラバならやらないと否定できない。

そして最近はレジスタンスの拠点や匿っていた村は皆殺しにされている。

まるで見せしめのように。これのせいでレジスタンスの士気もだいぶ下がってきている。

そして何よりカティマがこのことについて黙っているわけがないだろう。

きっと一人でも救おうと無理をするに決まっている。カティマが倒れてしまっては元もこもないのに。

数日前の村の襲撃に加え、つい先日レジスタンスの拠点のひとつが壊滅されたとの報が今日はいった。

カティマに知らせるか迷ったが、結局しらせることにした。

あとで知られたときに勝手な行動をされるのを恐れたからだ。

結果は話して正解だった思う。

この話をした時のカティマの悲痛な顔は忘れられない。

あの様子では後で知られた時に勝手に飛び出してしまってもおかしくはないだろう。

そしてもう一つの懸案事項がある。

それはあの村で拾ってきた青年だ。

ここらでは見ない赤い髪。そして肌の色。

少女の話では本当の兄などではなく出会ったのは二週間ほど前だと言う。

そして不自然に生き残っていたのも気になる。

今までは襲われた場所は全ての人が皆殺しになっていたのだ、それが今回は生き残りがいる。

いくらこの村から近く、カティマの救援が間に合ったとしても他の物は生存者がいないのにあの二人は生きている。

出来すぎじゃないだろうか、不自然な気がする。

村が襲われるちょっと前に住み着き。そして襲われて生存している。話が上手すぎる。

ダラバの間諜もしくは刺客と考えたほうが普通だろう。

とうぶんは警戒しておくしかない。こちらは動きを見せるまで手を出せない。

何の証拠もないのに切り捨てたりしたら、カティマが黙っていない。

そうなればレジスタンスが瓦解する可能性もある。それでは意味がない。

あとは謎の神剣使いの存在か・・・

カティマの話では直接会ってはいないが感じた気配から相当の使い手だと聞いた。

最初はあの青年かとも思ったが、カティマの話では神剣の気配を感じないという。それに剣も持っていない。

その神剣使いが味方であればいいのだが・・・現時点ではなんとも言えない。

どうやら”鉾”と戦っていたようだから、ダラバの仲間である可能

性は低いだろうが油断はできない。

どちらも今の時点では様子見するしかないということか。

「はぁ～」

もう一度溜息が出る。

その時一人の兵士がドアをノックする、「はいれ」と一言いうとキビキビした動作で部屋に入ってきた。

「クロムウェイ様、各拠点からの活動報告ならびに被害報告が来ております」

「そうか、そこにおいといてくれ。ごくろう」

「はっ！！」

兵士は大量の書類を置いて部屋から出て行く。

また、溜息が出そうになる。わたしの悩みはまだまだ尽きそうにな

い。

〈〈士郎〉〉

俺が目覚めてから一週間、そして俺がこの世界に来てから約一ヶ月が経とうとしていた。

まだ骨折の治りは完璧ではないが、他はほぼ完治している。

今ではこうして普通に動くことができる。そして気になったことがひとつあった。

この村の人は全員が訓練された動きをしている。

そのことをカティマに聞くと、ここの人たちは全員が旧アイギア国の兵士で現在レジスタンスの一員らしい。

そして目覚めた日に会った、顔に傷のある男。クロムウェイがレジスタンスのリーダーらしい。

クロムウェイさんも話してみると意外といい人だった。

最初はかなり警戒されていたようで素っ気無い感じだったが、今ではきちんと答えをかえしてくれる。

それなりに警戒をといて貰ったと考えていいと思う。

やはり組織のリーダーにもなると疑り深くなっても仕方がないのだろう。

あとカティマ達には魔術のことは話していない。

幸いカティマには戦闘を見られていなかったのでそのまま誤魔化すことにした。

あの戦闘では俺は一体の”鉾”を倒した”一般人”としか思われてない。

その前の魔術を使った戦闘はリリカにも見られていなかったから有耶無耶にできた。

この一週間で彼女達の人となりを見て悪い人たちじゃないのは分かっている。

彼女達を信用していないわけだはない。

だが、まだ不安定な要素が大きすぎる。俺の力がどれでけ異端かわからないからだ。

俺だけに被害がくるのならば、まだ良い。だがリリカにも被害がいく可能性を考えると、迂闊なことは出来ない。

ましてや今は戦争中だ。レジスタンスは現在押されているし、追い詰められれば何をするかわからない。

例えカティマやクロムエウィさんが俺を利用するのを反対したとしても、曲りなりにも組織なのだ。

周りの者に押さえこまれたらどうしようも無いだろう。組織は個人で成り立っているわけではないのだから。

だが目の前で命が失われようとしたら、間違いなく俺は力を使ってしまうだろう。

それが『衛宮士郎』という人間なのだから。

本当なら今すぐにでも飛び出して一人でも多くの人を救いたいのだが、リリカもいるし、それはできない。

”彼女”との約束もある、出来る限り自分の命も無駄にしないと昔に誓った。

それに無茶と無謀は違う。それぐらいのことはわかるようになったつもりだ。

今一人で突っ込んでも無駄死にするだけだろう。

あの”鉾”・・・あ～この名前はカティマから教えてもらったのだが、

まあ、その”鉾”の戦闘力を考えるとサーヴァント並み。

自分の一人が立ち向かっても勝てるわけがないだろう。

あの時は偶然勝てたが、不確定な要素に頼るつもりはない。

それにあの指輪の力は危険だ。使用するつもりもない。

そもそも使い方も分からないが。

下手したら次は仲間に向って剣を振るっていたとしてもおかしくは無い。

何か対策を講じられないかと思ったが、何も分からなくては無理な話だ。

この世界の住人、しかも同じような力を持ってる者なら何か知っているかもと思い、

一応カティマにこの指輪について聞いてみたが、何も分からないらしい。

何でもカティマは永遠神剣とかいう武器の使い手らしく、その武器のおかげで”鉾”と対等以上に戦えている。

一度カティマの永遠神剣を見せてもらい解析してみたがやはり解析

できなかった。

だからもしやと俺の指輪も永遠神剣。もしくはそれに近いものかもしれないと思ってさりげなく聞いてみたが、結果はダメだった。

カティマの話じゃ神剣の気配は感じられないし、このような指輪は見たことがないと言われた。

てか普通に考えればこれ剣じゃなくて指輪だしな。永遠神剣なんて言うくらいだからきっと剣なんだろう。

まだカティマ以外のを見たわけじゃないから決め付けるのは速いが。

でも考えれば、永遠神剣ってとんでもないもんだな。

名前からして、”永遠の神の剣”なんて大層な名前ついてるし。

武器を持つだけでサーバント並みの力を手に出来るわけだからな。

試しにカティマに俺も持てないかと聞いてみたら、何でも神剣に選ばれなきゃいけないらしい。

結局これも才能が必要なわけだ。

誰もが持てるわけではなく選ばれるわけだからこれも一種の才能と言えなくもないだろう。

なら才能の無い俺が持てる可能性は低いな。少し残念だ。

しかしこの指輪は何なんだろう？わからない事だらけだ。

カティマの言う永遠神剣でもなく、ましてや宝具でもない。

何故宝具ではないと思うかというと、あの時の力が聖杯に近いもの感じたからだ。

まあ、とりあえず・・・何も分からないことが分かったと思って前向きにいくか。

おっと、そろそろ夕飯の時間だな。仕込みをしなければ。

怪我が治り何もしないのは申し訳ないので、試しに手料理を振舞ったのだがこれがかなり好評で以来俺が毎日の食事を作っている。ち

なみにリリカも一緒だ。

あとカティマも最初は驚いたよう顔をしていたが、御代わりを3回ほどしていた。作るほうとしては嬉しい限りだ。

だがあの細い身体のどこに入るのだろう？人体の神秘だ。

なお、心の中で腹ペコ騎士王再臨と思ったのは内緒だ。

さあ、そろそろリリカが呼びに来る頃だろう。今日はこちらから迎えに行こう。

こうして俺は戦場に向う。厨房と言う名の戦場に――――

剣の世界6（後書き）

今回はクロムウェイを前面に出してみました。
原作だとかなり空気ぽかったんで、視点を与えてみました。
書いてて思ったのが若干性格が崩れてますが、気にしないでください。
この小説は基本、作者のご都合主義で出来上がってます。
あと今回、クロムウェイはレジスタンスのリーダーなんてやっているのだから色々悩みがあるのではないか？
原作ではそこらへん全然触れてないですし、勝手な想像です。

そして今回も読んで下さったかたありがとうございます。
このまま一気に剣の世界編を書き上げられたら、幸いです。
ちなみに今書いてる作品の外伝的なものをちょっとだけ書き上げてみました。話的にはこの物語が終わった後の話で、異世界の聖機師物語のクロスです。
もし見たい人がいるようでした切欠があれば上げてみるつもりです。
長くなりましたが、また次回お会いできたら幸いです。では、では。

剣の世界7（前書き）

ちょっと早いですが、週末投稿できそうにないので投稿です。

剣の世界7

〈〈士郎〉〉

今俺は村から少し離れた所の森を歩いている。

何故森に？かというとこの世界に来てから疎かになりがちだった日課の鍛錬をするためだ。

怪我をして一週間近く寝ていたのだ。身体が相当鈍っていた。

リリカの村にいた時でさえリリカと周りの目があるため、あまり長時間、時間を空けることが出来なく満足な鍛錬ができなかった。

だが今はそんなこと言ってられない。

たたでさえ”鉾”といサーヴァント並みの怪物がいるのだ。

鍛錬の時間はいくらあっても足りない。

さいわい今の俺は朝の掃除、朝食を作る関係上一番早く起きている。

若干、専業主夫みたいな気がしないでもないが気にしないことにする。

まあ、今はそれを置いといて。とにかくかなり早くから起きている。

森に行くとき、見張りの兵士には”リハビリのために軽く身体を動かしてくる”といい出ている。

最初は軽く注意されたが、今では日常として溶け込み気にも留められなくなった。

でも良く考えれば俺がこの村で鍛錬を始めてから約3週間、この村に世話になってから一ヶ月が経っている。

それだけの時間が経っているのだ。早いものだ。

「よし――――」

村からかなり離れたし、ここらでいいだろう。鍛錬の後には掃除と朝食がまっているのだ。

時間は無駄にはできない。

軽くストレッチをすませる。

全身の力を抜く。

あくまで身体は自然体。

意識を自分の内側に集中する。

魔術回路にゆっくりと魔力を通す。

自身の体に強化を下から上へ徐々に、調子を確かめるようにかけていく。

手にはいつもの夫婦剣。やはり手に一番馴染む。

頭の中で想像するは、あの赤い弓兵。

あの男の動きをなぞる様に型をとっていく。

俺ではまだまだ、あの弓兵には追いつけないだろう。

技量が足りない、経験が圧倒的に足りない。

その後は”彼女”を仮想の敵として身体を動かす。

だめだ・・・やはり今の俺では十合も打ち合えない。

もう一度初めからやり直す。

勝てる道を模索しながら―――

気がつけばかなりの時間が経っていたようだ。日が昇り始めている。

あまりに時間はなさそうだ。そろそろ帰らなきゃな。

持ってきたタオルで汗を拭く。

そこで俺は動きが止まった。

「カティマ・・・・・・」

そこにはいつからいたのかカティマがいた。集中し過ぎて気がつかなかったようだ。

俺はかなり動揺している。たぶん表情には出ていないと思う。

しかし迂闊だった。集中していたとはいえ、気配に気づかないとは。

どうする、なんと言って誤魔化す。それとも本当のことを話すか。

とりあえず、カティマの次の行動を見守るしかない。

こちらから下手に喋るのは得策ではない。彼女は聡明だ。

俺と彼女の間で緊張感が高まる。

「士郎・・・・・・その動き、見たことのない動きではありますが素人ではありませんね。それにあなたは”鉾”を一体倒したと・・・・・・。あのときは有耶無耶にされてしまいましたが、普通の人間

が”鉾”に勝てるはずがありません」

カティマは一度深く息を吸い込む。

「神剣使いでもないのに、その人を超えた動き。あなたは一体何者ですか・・・」

彼女の手には何時の間にか神剣が握られている。拙い・・・

確かに彼女が警戒するのも無理ないだろう。

いつかこのこと問いただされるときは来るとは思っていたが、よりにもよって今か・・・

ここで、「なんでここに？」なんて聞くのは愚かだろう。

この回答次第によって、彼女達の態度が変わると言うものだ。

ここは正直に話すしかないか。なにより俺が彼女には嘘をつきたくない。だが指輪のことは伏せとくべきか。

まだ自分でも分からないことが多すぎるし、余計な不信感を与える必要も無い

よし、心を決めたらだいぶ落ち着いてきた。後はカティマを信じて、なるようになるだけだな。

「何者かと問われれば、俺は衛宮士郎だ。としかいいようがないかな」

カティマの視線が少し厳しくなる。

「そんなことを聞いているのではありません」

静かに、しかし強い声でカティマが返してくる。これ以上長引かせるのは得策ではないか。

「わかった、降参だ。話すから、その剣をしまってくれないか・・・」

両手を上げ降参のポーズをしながら手に持っていた夫婦剣を消す。

剣が消えたのを見て、カティマが一瞬驚いた表情を見せるが直ぐに

元に戻る。

「わかりました・・・」

彼女はそう返し、剣を地面に突き刺す。まだ完全に警戒は解かれていないみたいだ。

しかたないだろう。さて何から話そうか・・・

「先ずは何から聞きたい？」

「先ほどと同じです。あなたは何者ですか」

声は先ほど同様硬い。

「さっきも言ったけど俺は、衛宮士郎以外の何者でもない。ただし・・・・・俺はこの世界の人間じゃない」

「この世界？」

「ああ、俺はこの世界以外の世界から来たんだ。信じられないかも

しれないけど」

彼女は少しの間目を瞑り考えるような素振りをしている。

「・・・わかりました。とりあえず信じます。ではその剣を消した能力は？それにその剣からはかなりの力を感じました」

とりあえずは納得してくれみたいだ。良かった。ここが最初の難関だったからな。

ここで頭ごなしに否定されたら話が進まなかった。

さて、魔術についてはどうするべきか？とりあえずこの世界にも魔術らしきものはあるみたいだし話しても問題ないだろう。

「これは魔術だ」

「魔術？魔法とは違うのですか」

魔法！？魂の物質化や平行世界の運営のことか・・・

この世界では魔法が普通に使えるのか？

いや、それなら俺が剣を消したときに驚くのはおかしい。

まだ、この世界の魔法とやらを見たことはないけど、元の世界の魔術と変わらないとみていいだろう。

「あ～、この世界の魔法みたいなもんかな・・・俺の世界では魔術というんだ」

「そうなのですか。では先ほどの剣は何ですか？永遠神剣ほどではありませんけどかなりの力を感じましたけど」

「あれは、俺が魔力で作り出した剣だ。そして俺が使える魔術の一つだ」

「魔力？それはなんですか」

あれ？そこから通じないのか・・・やはり俺の世界の魔術とは根本的に理論が違うのだろうか。

魔術と魔法も俺の世界では全然違うものだが・・・それをこの世界

の科学レベルでは説明してもほとんどの物が魔法になってしまう。
それに理論が根本から違う物を教えていたら日が暮れてしまう。
とりあえずこの世界の魔法について聞いてみるのがよさそうだ。
「えっと、こっちの魔法はどうやって魔法を使うんだ？・・・いや、魔法を使うためには何を消費して使うんだ？」
これは正確ではないが、俺たちの世界では基本は魔力を消費して魔術を使う。一概にそうとは言えないが。
「・・・私達はマナと呼ばれるもの消費して魔法を使用します。」
どういうことだ？空気中のマナを何も変換せずに使っているということか。それは凄いな――――
だが次の言葉でさらに俺は驚かされる。
「そして私達神剣使いは自身のマナを消費して魔法を使用します。神剣使いは神剣の担い手になると同時に身体はマナで構成されるのです。ですから姿、形は人間ですが人間ではないのです」

カティマの表情が少し暗くなる。

てか、まてまて。じゃあ神剣使いというのは生きながらにしてサーヴァントに近い存在になるということか！！

英霊も現世に現れるときはエーテルで肉体を構成している。

ようはそれと同じということだ。

永遠神剣、とんでもない代物だな。世界と契約しなくてもそんなことが可能とは・・・

そんな物解析できなくて当然だ。それよりもカティマが少し落ち込んでるみたいだしフォローをいれとかないとな。

「そんなことはない。カティマは人間だよ。俺には人間にしか見えない。例え周りが何と言おうと俺にとってカティマは人間の女の子だよ」

カティマはさっきまでの表情を一変させ、困ったような表情になっていたが、

「ありがとうございます」

と一言だけ言った。そのとき何故か顔が若干赤かった気がするが気のせいだな。

「さて、話がずれたけど・・・とにかく俺の言う魔力はカティマの言うマナだと思ってくれ」

郷に入っては郷に従えというし、カティマに分かり易いようにこちらの世界の話に合わせたほうがいいだろ。

「そして、俺は魔力を使い武器を作り出すことができる。その他には自身の肉体の強化なんかもできるが、これは神剣使いには遠く及ばないな」

「そうですか・・・なんかと言いましたが他には何ができるんですか？」

「あとは、物質の強化、物の解析かな。俺には魔術の才能がなかったからそれぐらいしか出来ないんだ」

「才能が無いなんて謙遜です。そんなに凄いことが出来るじゃない

ですか」

少し驚いた。そんなこと言われたのは初めてだ。元の世界じゃ散々回りから才能無いって言われてたしな。

やはり世界が変われば見方も変わるのだろう。

っと、かなり日が昇ってきたな・・・もうリリカも起きている頃だろうし、早く戻らないとな。

「そろそろ日も昇って来たし、戻らないか？聞きたいことがあるなら、また後で聞くよ」

まだ色々聞きたそうにしていたカティマだが急に真剣な顔になった。それを見て俺も自然と同じような表情になる。

「では、最後に・・・あなたは私達の味方ですか」

きっとこの言葉には色々な意味が含まれてるのだろう。

なら俺のいうことは決まっている。

「もちろんだ」

だから笑顔と共に返すことにする。

「わかりました」

その一言と共にカティマも軽く微笑んで返してくれる。

その顔は俺が見たカティマの中で一番綺麗な顔をしていた。

そして俺は改めて決心する。

この戦争を止めると———あの村のような被害をこれ以上出させないために

無駄な血を流させないために

『正義の味方』目指すものとして

そしてこの顔を曇らせないために――

剣の世界7（後書き）

書いた私自身今回少し首を傾げています。
設定を理解しきれていないのもありますが、文章で表現できませんでした。すみません。
神剣魔法もマナを消費して使うでいいんでしょうか？
少なくとも神剣シリーズでは魔力という単語を聞いた覚えないんですよね。
あとエーテルというのもいまいち理解できていないです。
神剣シリーズではマナを人の使える形にしたものと表記ありましたけど詳しくはちょっと分かりませんでした。
もしも違う点がありましたらこの作品だけの独自設定と思ってください。
あと現在リアルで色々立て込んでまして・・・
更新を定期で予定していたのですがちょっと予定を立てられなくなりました。
ストックの分は毎週土曜か日曜に更新するつもりですが
それが切れたら何時になるかわかりません。
できあがり次第上げるつもりではいますが。
ごめんなさい。

最後ですがここまで読んでくださった方ありがとう御座います。

次回はリリカが少し表にでてくると話です。　では、では。

剣の世界8

〈〈リリカ〉〉

ワタシは今、部屋で一人、ベッドに腰掛ボーッと考え事をしている。

ある悩みがあるためだ。

別にここでの暮らしに不満を持っているわけではない。

みんな、よくしてくれているし、親切だ。

そして私達を受け入れてくれた。

あの事件を引きずっていないわけではないが、ワタシの中では一応区切りをつけられた。

これもお兄ちゃんがいたからだ。

もしワタシ一人だったら耐えられなかったと思う。

それにここでの生活は一応満足している。

お兄ちゃんと一緒にいれるし、割り当てられた仕事の家事はもともと好きなので問題ない。

それに家にはカティマおねぇちゃんにクロムウェイさんもいる。

家族が増えたみたいで、毎日が楽しい。

では何の悩みがあるのか？というと・・・

それはお兄ちゃんとカティマおねぇちゃんだ。

数日前にいつも通りに朝食を作りに厨房に行くと、いつもならワタシより早く起きて朝食の準備をしているお兄ちゃんがいない。

珍しく寝坊かなと思い部屋に起こしにいくと部屋には誰もいない。

前に、早くに起きて外で体を動かしているとは聞いていたので、今

日はちょっと戻るのが遅れてるだけなんだなと思って気にしないことにした。

そしていつも通り朝食の準備に取り掛かる。

調理を開始して十分ぐらいだろうか・・・家の扉が開く音が聞こえる。

ワタシはお兄ちゃんが帰ってきたとおもい、嬉しい気持ちを隠そうともせずに出迎えに行った。

お兄ちゃんの姿が見えたのでワタシは「おかりなさい」と言おうとしたけど、その言葉を最後まで紡げなかった。

お兄ちゃんの後ろからカティマおねぇちゃんが家に入ってきたからだ。

「えっ！？・・・・・・」

思わず口から漏れてしまった。

お兄ちゃんはワタシを見た後に少し困った顔をしながら「外で偶然

会ったんだ」と言う。

本当にそんなんだろうか？でもそのときはそんなこともあるのかなで納得した。

だけどその日を境にお兄ちゃんとカティマおねぇちゃんが妙に仲良くなった気がする。

距離が近くなったというか、二人で仲良く話しているのを良く見かけるようになった。

ワタシがお兄ちゃんに「最近カティマおねぇちゃんと仲いいよね」というと、「そうか？そんなこはないと思うぞ」なんて言う。

１０人に聞いても１０人全員が仲良くなったと答えると思う。それぐらいの仲の良さだ。

クロムウェイさんも、最近のカティマは良く笑うようになったと言っていた。

そんな二人を見てると胸がモヤモヤする。

かまって貰える時間が少なくなって寂しいのだろうか？

自分の気持ちが良くわからない。

でも今まで以上にお兄ちゃんと一緒にいたいと思った。

ワタシはこんなに独占欲の強い子だったろうか・・・

「はぁ～」

知らず知らずのうちに溜息が出てしまう。

とりあえずこのモヤモヤを忘れるためにワタシはベッドでうつ伏せにになって意識を手放すことにした。

〈〈士郎〉〉

最近は特に代わり映えの無い日々を送っている。

いや、少しだけ変わったことがあったか・・・

一つはカティマと良く話すようになった。

あの朝の出来事以来、少しは信用してもらえたようだ。

今では朝の鍛錬にたまに顔をだしに来ては、練習相手になってもらっている。

カティマと相手をして分かったが、やはり神剣使い相手に接近戦は無謀だ。

こちらが魔力で肉体を強化しても軽く上を行く身体能力をもっている。

普通の人間相手ならまだしも”鉾”相手には厳しいとカティマにも言われた。

分かってはいたが口に出さられるとショックだ。

だからと言ってあの正体不明の力に頼るつもりは無い。

あの力が使えれば”鉾”と互角以上に戦えるだろうが・・・やはりあの力は危険だ。

接近戦は今後の課題だな。

となると今の俺が戦闘で出来ることは遠距離支援ということになる。

カティマにその話をすると最初は凄く反対された。

戦闘自体に出ることが危険すぎると。

だが、俺にも譲れないものがある。

カティマ達が命の危険を晒して戦っているのに自分だけ遠くで待ってるなんて出来るはずがない。

それでも俺の意思を必死に伝えると、カティマは諦めたように溜息をついて

かなり離れた位置にいるなら、という条件でなんとか了承をもらえた。

確かに俺が”鉾”と接近戦になれば勝てないだろうし、カティマの足を引っ張ることになる。

そうなれば結果的にカティマを危険に晒してしまう。

少し心配し過ぎな気がしないでもないが、たぶんそういう考えがあってのことだろう。

俺も足を引っ張ることなんかしたくないし、それでは本末転倒だ。

まあ、何にせよ了承が貰えてよかった。町で留守番なんてとても我慢できないしな。

それと現在の所、俺の魔術について知っているのはカティマとクロムウェイさんだけだ。

カティマには知られてしまったし、クロムウェイさんにバレるのも時間の問題だと思い話すことにした。

やはりこの世界でも俺の力は、異質らしくあまり周りには話さないほうがいいと言われた。

もちろん自分から話す気なんてないけどさ・・・

それとクロムウェイさんから兵達の武器をを作ってくれないかと言われたがこれは断った。

理由はいくつかあるが、挙げるとしたらまず武器が破損したら魔力になって消えてしまうためだ。

これでは少しでも武器が破損したら兵は丸腰になってしまう。

あとは俺の魔力だけで武器を作るなんて非効率的すぎるし、武器の大量生産なんて非現実的すぎる。

途中で魔力切れで倒れてしまうだろう。

断ったときにクロムウェイさんが、武器の調達が・・・資金が・・・

などブツブツ呟いていたが、気にしないことにする。

彼には彼なりの悩みがあるのだろう。

あと一つは最近リリカの様子がおかしいことだ。

最近妙に上の空というか、ボーッとしていることが多くなった。

話しかけても返事が中々返ってこない時もある。

何か悩みでもあるのだろうか？

最近あまりかまってあげられなかったし、明日時間を作って話を聞いてみよう。

それにしても今日はいい天気だ。これなら洗濯物も早く乾きそうだ。

そんなこと考えながら黙々と洗濯物を干していると、不意に手が止まる。

全身に物凄い違和感をを感じる。

（な・・んだ・・・これは・・・・）

まるで結界を外から無理やりこじ開けられたような感覚。

周りの景色に異変が生じる。

空を見上げると――――

――――――空が割れていた――――――

「な・・・なんだ！？」

思わず声が出てしまう。

今の光景は異常だ！！

空が地面と水平に裂けている。

周りをみると、村の人も皆唖然とした表情で空を見上げている。

やはりこの世界でもこれは異常なことらしい。

そしてその裂け目が次第に広がっていく。

何が起きるのか・・・この分からない事態に備えて自然と唾を飲み込む。

そして裂け目が広がりきったところで、そこから

――――――一匹の強大なクジラが出現した――――――

「えっ・・・・・・」

こんな間抜けな声が出ても仕方がないだろ。

だって巨大なクジラが空を裂いて出てきたのだ。

かなりシュールな光景だ。

まるで童話の中の話の様にクジラが空をゆっくり移動している。

周りからは天使様だ・・・とか聞こえるが、あれが天使か？

ここにもしも遠坂がいたら周りの物に手当たり次第ガンドを打って怒鳴りちらしているに違いない。

この世界に来て初めて遠坂がいなくて良かったと思った。

そんな事考えてる内にクジラはドンドン高度を落とし、遂には着地した。

皆その光景を黙って見つめている。

そんな時間が何分か過ぎただろうか・・・

ようやく村が一斉に騒がしくなった。

みな先ほどのことを、それぞれ勝手なことを口にしている。

俺も我に返りとりあえず、カティマかクロムウェイを探す。

今の出来事の意見を聞くために。

剣の世界８（後書き）

ということで剣の世界８話目です。

やはりモノベーみたいなのが出てきたら普通の人は驚くと思うんですよね。

次回は少し話しが飛びます。

あまり書くこともないので短いですが後書きはこれで終わりです。

感想などあれば気軽にどうぞ。

最後に毎度ですけど、ここまで読んでくださりありがとうございます。

では、では。

剣の世界9（前書き）

ちょっと土日に予定が入り投稿できそうにないので
かなり早めに投稿です。

剣の世界9

〈〈士郎〉〉

昨日の空飛ぶクジラ騒動から一日がたった。

そのクジラせいでさっきまで俺の回りも慌しかった。

昨日、今日と連日でレジスタンスでクジラについて協議をしていた。

それもついさっき終了したところだ。

俺は会議に参加することは出来なかったがカティマに聞いたところ、

あのクジラの調査に行くという方向で決定したみたいだ。

アレが何なのか分からないし、俺も調べることには反対はない。

それに調べる事になった一番の理由は村の人の声だ。

アレを天の使いだと言う人が大量に出てきたのだ。

その声を無視することも出来ないので、行かざる負えなくなったといっても過言ではない。

結果身軽なもの数名で編成した少数の部隊で様子を身に行くことになったらしい。

その中には当然カティマも入っている。俺も無理を言いなんとかその部隊に入れてもらうことが出来た。

出発は明日の昼ということだ。

そのことをリリカに話したら、凄く心配されて反対された。

終いには「ワタシも行く」なんて言い出して困ったが、調査だけで危ないことはないからと、なんとか納得してもらった。

やはりあの村の事件をまだ引きずっているみたいだ。

最後に「お兄ちゃんはいなくならない？」と言われた時には酷く胸が痛んだ。

リリカは極端に親しい人が居なくなるのを恐れているみたいだ。

それも仕方ないのかもしれない。

父親のこともあるし、あの様な事件も起きたのだから。

俺には――――

「大丈夫だ、絶対に居なくならない」

――――こんな言葉を掛けてあげることしか出来ない。

やはり、早めにリリカの話を聞いてあげたほうが良さそうだ。

この任務から帰ってきたら時間をつくらないと・・・改めて思う。

それと今日はカティマとクロムウェイさんの二人はまだ話す事があるらしく、皆が帰った後もクロムウェイさんの部屋に篭っている。

とりあえず俺とリリカは頑張っているカティマと、クロムウェイさんの為にいつも以上に料理の腕を振るうことにした。

〈〈カティマ〉〉

出発の日。私達は予定を繰り上げて大分早くに出ることになった。

朝、もって行く備品等の最終確認をしている時、一本の伝令が入ったのだ。

このことから時間を大分繰り上げなくてはならなくなった。

伝令の内容はこうだ。

クジラの着陸した地点からそう遠くない村に向って”鉾”が進軍していると。

しかもかなりの規模であると報告を受けた。

クジラの調査を早くしたいが、村のことを放って置く事はできない。

それにクジラと村の場所はそんなに離れていない。

村を襲撃し終ったら、今度はクジラの方を襲いに行くかもしれない。

どちらも見逃すことはできない。

急遽、予定していた部隊の人数を増やし多くの備品をもっていくことにした。

これは村が襲われているためだ。

部隊の準備を待っている時間は無いので兵に指示をだし、先に発つことを決めた。

今は私と士郎だけで村に向っている。

先ほどから、全力近くで走っているせいか士郎がかなり苦しそうだ。

「士郎大丈夫ですか？」

「ああ、平気だ」

彼はそう言うがかなり辛そうだ。汗も凄い量を掻いている。

私はこのままでは村に着く前に潰れてしまうと判断する。

「士郎、あなたは自分のペースで着いてきてください。このままでは持ちません」

士郎は少し考える素振りを見せた後「わるい」そういってペースを落としていった。

その時の士郎の顔が悔しそうに歪んでいたが、仕方が無い。今は一刻を争うのだ。

そして私は更にペースを上げる。

村の人たちの安否を気にしながら――――

〈〈士郎〉〉

やはりカティマは速い。

こちらも全力で強化をしているのに追いつけない。

しかもこちらを気遣ってペースを抑えていたようだ。

先ほど言葉を交わした後、さらに速いペースで駆けて行った。

分かってはいたがかなりショックだ。

神剣使いとはこんなに身体能力に差があるとは。

本当に反則だと思う。

自分の力不足が悔しい。

赤い弓兵ならあのペースについて行くことができるのだろうか。

きっと出来る。

なら俺に出来ないわけがない。

まだ鍛錬が足りないだけだ。

俺は心の中で思う

――――もっと強くならなければ――――

その時、心臓が一際跳ねる。

（な・・なんだ！・・・・・・）

この感覚は・・・・・・ま、拙い。

指輪の力が発動しかけているみたいだ。

自分の中で暗い感情が湧き上がってくる。

俺は一度脚を止める。

考えることは一つだけ。

（自分を保つんだ！落ち着け、落ち着け）

何度も繰り返す。

しばらくすると不意に今まで感じてた違和感が綺麗さっぱり消えた。

どうやら押さえこめたようだ。

大量に浮かんだ額の汗を拭う。

今は何とか押さえ込めたが次も上手くいくとは限らない。

それに今回は前回程の強さを感じられなかったから、なんとかなったんだと思う。

今は、そんなこと考えてる場合ではないな。

早くカティマに追いつかなければ。

そして俺は再び走り出す。

――だが村に着けば既に終わった後だった――

――焼けた村

――――動かなくなった人だった物

――――そして広場の中心に立ち尽くすカティマ。

まるでこの光景を目に焼き付けているようだった。

事実、きっとそうなのだろう。

きっとカティマは”もっと自分が早く着いていれば”そう考えて居るのかもしれない。

そして全ての責任は自分にあると。

俺もやはりこの光景は何度見ても慣れるものじゃない。

リリカの村の時のように我を見失いはしないが、心の中は煮えくり返っている。

こんなことを平然とするグルン・ドラスが許せないと。

そしてダラバ＝ウーザを許すことが出来ないと。

これが戦争だと言われても納得出来るものじゃない。

俺は後ろから、ゆっくりカティマに近づく。

「カティマ・・・」

振り返った彼女は、無表情だった。

だが俺にはその表情は今にも泣きそうな女の子の表情にしか見えなかった。

だからだろうか、俺の口からは自然とこんな言葉が漏れていた。

「カティマの所為じゃない」

と・・・・・・

カティマは何かを口にしようと開きかけたみたいだが、言葉を口にすることはなかった。

そして少しの間を置き表情を凛々しい物に変えると口を開く。

「行きましょう、士郎。”鉾”はあちらの方に向ったようです」

俺は頷くだけで返事を返し、カティマと一緒に鉾の向った方角に駆け出す。

こうして、この燃え盛る村を後にした――――

剣の世界9（後書き）

9話目です。次でやっと10話ですね。ここまで長かったです。

改めて書くのは大変な作業だと思います。

たかが数分程度の量でも作者のかたはその倍、更にその倍以上の時間をかけて書いてることを身をもって知りました。

あと嬉しいことにこの作品のユニーク数がいつの間にか1万を越えてました。

それだけの方が読んで下さっているなんて嬉しい限りです。

何かお返しを考えていますがいい案ありますかね？

まあそれは後々考えて行きたいと思います。

それでは今回も最後まで読んでくださったかたありがとうございます。

次回は沙月の登場です。

なにもなければ来週の土日のどちらかに投稿します。では、では。

剣の世界１０

〈〈士郎〉〉

あの村を後にして５分程たっただろうか。

俺たちの視界にはあのクジラの巨体がはっきりと見えてきた。

近づいて思うがやはりデカイ。

まだかなりの距離があるとはいえ、その巨体は小さな山のように見える。

横を走るカティマもその大きさに驚いているような気配を感じる。

そしてクジラまで二ｋｍを切ったところだろう。

今まで密集していてあまり視界の良くなかった森が少しだけ拓いていた。

そのおかで遠くまで視界に収めることができる。

そしてその視界の先には”鉾”の群が見えた。

「先に行きます。士郎は離れていてください」

横から声を掛けられる。もちろんカティマの声だ。

その言葉通りカティマは更にペースを上げ先に行ってしまう。

確かにこれ以上近づけば接近戦に持ち込まれる可能性が高くなる。
そうなれば足をひっぱてしまうだろう。
だから俺は脚を止める。だが唯見ているわけではない。
ここから敵までの距離は１．５ｋｍ弱。
普通ならここからの攻撃は無理だろう。
しかし俺なら可能だ。
視界に更なる強化をかけその精度を上げる。
左手には漆黒の長弓。
捕らえた視界には”鉾”の群と対峙する１人の少年と二人の少女の姿が見えた。
”鉾”と互角以上に戦っている。恐らく神剣使いなのだろう。
しかし１人の少女が体勢を崩し二体の”鉾”に追撃をかけられようとしている。
あれでは危ない。
カティマも全力で駆けてはいるが間に合いそうにない。
俺は弓を構え狙いをつける。

狙うのは目の前の敵ではない。
狙うは常に心の中に写る敵。
そして一呼吸の間に2本の矢を放った。

〈〈沙月〉〉

状況はいきなりだがあまり芳しくはない。
望君と希美ちゃんと合流したときには既に大量のミニオンに囲まれていた。
二人とも口では頼もしいことを言ってはいるけど現状は厳しい。
慣れない戦闘に身体は平気でも精神的にはかなり疲弊しているはずだ。
その上にこの大量のミニオン。

かなり辛いはずだ。
最初はこちらから攻め少しは押していたが徐々にこちらが押され始めている。
危ない場面も何度か見え始めてきた。
ミニオン一体、一体の力ならたいした事は無いが、連携を組まれるとその戦闘力は飛躍的にあがる。
「くっ！」
現に今、ミニオンの攻撃により体勢を崩された。
（まずい！）
視界に写るのは追撃をかけて来る二体のミニオン。
一体なら捌けたかもしれないが、二体は無理だ。
無傷とはいかない。
私は咄嗟に次に襲い掛かってくるだろう痛みに覚悟を決める。
「えっ？」
しかしその痛みが襲ってくることはなかった。
追撃をかけてきた二体のミニオンは霧となって消える。

残ったのは矢だけだ。

「矢？」

私が疑問に思う間もなく、私の神剣「光輝（コウキ」の神獣、ケイロンの声が頭に響く。

（近くに我らの力の波動に似たものを感じます。恐らくは同等の使い手かと。）

そして望君の神剣「黎明（レイメイ」の神獣レーメが鋭い声をあげる。

「来たっ」

その声に私もそちらに視線を向ける。

すると先程と同様に多くの矢が射掛けられる。

その矢を浴びて次々にミニオンが消えていく。

どう考えてもアレは唯の矢の威力ではない。

普通の矢であればミニオンは多少の手傷を負うくらいだ。

しかしあの矢は一本、一本が確実にミニオンの命奪っていく。

私はこれがケイロンの言った者の仕業だと思った。

しかし違った。
矢により相手のミニオンの態勢が崩れた隙を突き、茂みから大剣を担いだ黒衣の少女が現れた。
突然の登場に、慌てたミニオン達が飛びのいていく。
「貴方達っ、大丈夫ですか！？」
私達が返事を返す間もなく少女は続きを喋る。
「火急の事態ゆえ、まずはこの状況を打破しますっ！」
そう言ってミニオンに向って斬りかかっていった。
横からは希美ちゃんが「か、格好いい・・・」なんて言っていたようだが聞かなかったことにする。
色々と言いたい事はあるが今が戦闘中だ、油断はできない。
そして少女の方を見ると圧倒的だった。次々にミニオンを屠っていく。
強く凛とした姿に、同じ女の私でも目を奪われてしまう。
そして彼女の死角をカバーするように飛んでくる矢。
それが彼女を圧倒的なものにしていた。
凄い連携だ。連携もさることながら、あの矢は一度として的を外し

ていない。
私は突如現れた黒衣の騎士達の戦いぶりに心が震えた。
その震えに後押しされるように望君達に声をかける。
「望君、希美ちゃん、今よ！」
その声に反応し望君達はミニオンに斬りかかっていく。
先程までの動きが嘘のようにキレのある動きだった。
私は心の中で軽い安堵を覚えると共にミニオンに斬りかかっていった。

〈〈士郎〉〉

視界に写る”鉾”はいなくなった。
カティマ達も剣を降ろしている。どうやら戦闘は終了したようだ。
ここからあの三人と話すカティマの姿がみえる。

俺も合流すべきだと思い弓を消しそちらに向う。

だが強力な殺気がこちらを襲う。

その殺気に反応し、咄嗟に干将・莫耶を投影しそちらに構える。

襲ってきた強い衝撃に構えた短剣ごと俺の身体は１０メートル程飛ばされた。

そして地面に転がりながらもなんとか立ち上がると、そこに今まで見たことも無いような異質な”鉾”がいた。

あの雰囲気は普通ではない。全身を刺すような鋭い殺気。あれは確実に強い。

見ただけで分かる相手だった。俺はもう一度手に夫婦剣を投影する。

先程の短剣は受けると共に砕け散ってしまった。

咄嗟に投影したために骨子の想定が甘かったようだ。

よく防げたものだと思う。

背中には大量の冷や汗をかいている。

”鉾”がこちらを向く。

どう頑張っても、俺１人ではアレには勝てない。

ならどうするか考えるんだ。

別に勝つ必要はない。

今の騒ぎと殺気でカティマ達も気づいたはずだ。

一分もしない内にこちらに向ってくるだろう。

なら耐えるだけ。

問題は耐えられるかだ。

俺は頭の中で勝つためではなく生き残るための戦術を築きあげていく。

そして心を決める。

するとこちらの考えが纏まるのを待っていたかのように”鉾”がこちらに向ってくる。

速い！

瞬きする間もなく、１０m程の距離を詰められる。

全身に今出来る限りの最大限の強化をかける。

そして”鉾”の剣が振り下ろされる。

これを受けてはダメだ。

この敵の前では俺の強化など無いに等しい。

逸らすか、避けるかだ。

俺は振り下ろされる剣をギリギリの所で避ける。

避けたために相手の剣は地面に降ろされ、小さなクレーターを作る。

その威力に背中にかく汗が増す。だが大丈夫だ。

目はついていける。問題は身体がついていくかだ。

敵は振り下ろした剣を今度は下から斜め上に薙いで来る。

俺は相手の剣を夫婦剣を交差して受け止め、力に逆らわずそのまま後方に飛ぶ。

受け止めた手が痺れる。

分かってはいたが凄い威力だ。

宝具ではなく普通の剣なら今頃俺の胴体ごと切断されていたに違いない。

こちらが体勢を整える前に”鉾”が向ってくる。

俺は持っていた干将、莫耶共に相手に投げつける。

しかし簡単に弾かれ的外れな場所に飛んでいってしまう。

そのまま次に投影した夫婦剣で相手の縦に振り下ろしの一撃を捌く。

そして数度捌き、相手に大きな隙が出来たときに相手の腹に蹴りを入れて後ろに飛びのく。

相手は少し怯んだだけてダメージは無いようだ。

そしてもう一度、両手にもつ短剣を投擲をする。

今度も唯投擲しただけなら防がれてしまう。

しかし前方から今投擲した2本、後ろから引き寄せられる様に先程投擲した二本が”鉾”に向っている。

敵は後ろの二本にも気がつき迎撃する態勢を見せる。

このままでは敵の身体能力を考えれば容易く防がれてしまうだろう。

だから俺は手札の一つ切る。

俺とあいつにしか使えない手札を。

「壊れた幻想（ブロークン・ファンタズム）」

四本の短剣が相手の至近距離で爆発を起こす。

視界が爆発の煙で覆われる。

そして煙が晴れるとそこには、外傷こそ無いものの服がボロボロになった鉾がいた。

ダメージを負った様子はない。

このぐらいでやられる相手ではないと分かってはいたが、ほぼ無傷の”鉾”をみて愕然とする。

しかし問題はないようだ。

「士郎！！」

間に合ってくれたみたいだ。

カティマの声と複数の足音が聞こえる。

そこから俺は援護にまわる。

相手の鉾も強かったが、こちらの神剣使いは合計で４人。

新たな三人の神剣使いも凄いが、更に凄いのはカティマの技量だった。

鉾の攻撃を難なく裁き、そして確実にダメージを蓄積させていく。

その戦い方は三人と違い、危なげなく見ていて安心できるものだった。

俺は所々で危ない場面で矢を放ち、鉾の注意をこちらに向けさせる。

そして遂に鉾は決定的な隙を作り、カティマに一刀のもと両断させられた。

直ぐにカティマが他に敵がいないか気配を探るが、もう大丈夫のようだ。

こうして短くも長かった戦闘は終わりを告げた。

剣の世界１０（後書き）

予約掲載・・・便利な機能ができましたね

これにより予定があっても土曜に投稿できるようになりました。

ですがストックがあと2回で切れます。

現在も少しづつ書いていますが、中々進んでいないのが現状です。

今まではほぼオリジナル展開で来てましたが、ここからはしばらくシナリオに沿って書きますのでニコニコなどで確認しながら書いてるので遅いです。

たぶん魔法の世界までは多少のオリジナルを入れながらもほぼシナリオ通りに進みます。

原作に沿っても飽きてしまうので重要なとこ以外は結構あっさり進めていこうかと考えてますがどちらがいいですかね？

そこらへんは自分では判断つきにくいです。

では後書き、少し長くなってしましましたがこれで終わろうと思います。

次回も土曜の０時に投稿です。

毎度読んでくださりありがとうございます。では、では。

剣の世界１１

〈〈士郎〉〉

敵を倒した俺たちは簡単な自己紹介をすませた。

といってもカティマは一度目の戦闘の後に簡単な自己紹介を済ませていたらしく、俺と三人だけがそれぞれを紹介した。

まず少年のほうが世刻　望　永遠神剣「黎明」の使い手

そして小さな人型の妖精？みたいな守護神獣　”レーメ”　かなり古く偉そうな喋りをするのが特徴だ。

そして二人の少女のうち黒髪の子が永峰　希美　永遠神剣「清浄」の使い手

ついでに言うとあのクジラは”ものべー”と言いこの子の守護神獣であるらしい。

それを聞かされて改めて永遠神剣の破格さを思い知らされる。

最後に赤い髪の少女が斑鳩　沙月　永遠神剣「光輝」の使い手。

その守護神獣”ケイロン”　こいつはケンタウロスに重厚な鎧を着せたような外見をしている。

最初みたときは幻想種かとも思ったが、神剣にはこのような感じの

守護神獣というのが必ずいるらしい。
カティマのは見せてもらったことがないがきっとこんな感じのがいるのだろう。
「そいえば士郎さんって神剣もってないんですよね？それなのにミニオンと戦えているなんて凄いですね」
永峰が本当に感心したような表情をし、その後レーメが引き継ぐ。
「うむ。神剣の気配は感じぬし、弓や剣をだしたり消したり不思議な力なのだ」
やはり神剣も持っていないのにこんな力を持っていることは、ここでは珍しいことなのだろう。
でも不思議の塊の神剣の守護神獣に不思議と言われるなんて、なんとも言えない気分だ。
俺からしたら神剣のほうがずっと規格外で不思議な力だと思うのだけどな。
「まあ、俺は少し特別でね・・・あれも魔法みたいなものかな」
それを聞きレーメが「ますます不思議な力だな」なんて言っている。
俺は力の説明を簡単にし、とりあえず魔法ということにしておいた。
そのあと簡単に彼らの事情を聞いたが、それは正に驚愕の一言だった。

彼らは通っていた学校ごとあのクジラで別の世界からこの世界に飛ばされてきたと言うのだ。

その非常識さに思わず思考が飛びかけたぐらいだ。

だが嬉しい面もあった。

聞いた話から推測するに彼らは俺と同じ世界、もしくは似たような世界から来たという可能性が高いことがわかった。

これは元の世界に帰るための大きな手かがりだ。

この話に関しては結構絶望的だったために、ここに来てこの光明は素直に嬉しい。

そして話は俺が思考に耽っている間にどんどん進んでいった。

話の始まりはカティマが彼らに天から現れたのかと聞きそれを赤い髪の少女、斑鳩が肯定したためだ。

その後カティマは彼らを天使様と呼びとんとん拍子に話が進んでいく。

村人も天使様とか言っていたが、彼女の話を聞くにそう言う伝承があるらしい。

要約すると「天を裂いて現れた物は神の使いで天使。その天使が救ってくれる」そんな感じだ。

俺も色々と言いたいことはあったが、まるで歌劇のようにカティマの1人劇が始まり口を挟むことができなかった。

そしてとりあえず彼らと学校に残っている者を村に招待するという方向で話は進んでいったみたいだ。

俺はとりあえず後続の部隊への報告も含めて一足先に村に戻ることにした。

カティマは世刻達を村まで案内するために、現在彼等と一緒にいる。

そして現在の俺は歓迎用の料理をリリカと共に作っている。

「お兄ちゃん、こっちのスープと焼き物終わったよ。次は何をすればいい？」

「じゃあ、こっちの揚げ物みててくれ。俺はオーブンを見てくる」

「了解しました」

リリカが笑顔で頷いてくる。

今でこそ笑顔だがさっきまでは大変だった。

村に帰ってきたときは、リリカが抱きついてきたり、ボロボロの俺を見て泣いたりで色々あったのだ。

最初はリリカに休めと言われたがリリカ1人に任せるのも悪いし、俺自身の気持ちの切り替えにも調理は調度いいと思った。

先程の血なまぐさい戦闘から、こうした日常に切り替えるには普段していることをするのが一番いい。

こうして俺とリリカは忙しなく動き品数を増やしていく。

■

日も暮れてから少し時間が経った頃カティマが戻ってきた。

世刻達と大勢の者と共に。

なんでもこれでも一部でまだ学校に残っているものがいるらしい。

本当に大所帯で来たものだと思う。

どう見ても作っておいた量では足りそうにないので俺とリリカは急遽追加の料理を作る羽目になった。

そして歓迎の宴も滞りなく進み、宴が行われている場では笑い声などが聞こえてくる。

俺とリリカも最後の追加の料理を作り終え、宴に参加することにした。

見ると宴も終盤に差し掛かっているようだ。

皆思い思いに盛り上がっている。

「すごいね」

リリカが感嘆の言葉を呟いた。

無理も無いかもしれない。

世刻達が連れてきた物は皆学生服を着用している。

この世界では見慣れない服だ。

しかも皆同じ服を着てこれだけの人数がいる。

この世界の人には珍しい物に写るのだろう。

「だな」

とりあえず俺はリリカに相槌をうっておく。

そして空いてる席に俺とリリカで座り、二人で食事を開始すると永峰と知らない少女が近づいてくる。

「士郎さん、今日は美味しい料理ありがとうございます」

そして永峰が俺に向けて声を掛けてきた。その視線はそのまま俺の横のリリカに向い「か、かわいい・・・」などと呟いている。

とりあえず俺は彼女に返事を返す事にする。

「その子はリリカだ、仲良くしてもらえたら嬉しい。それと喜んで

もらえたようでなによりだ」

「はい、とっても美味しかったです。今度お料理教えてもらえると嬉しいです。そ、それとリリカちゃん・・抱きしめていいですか？」

どうやらリリカの可愛さにＫＯされたらしい。だが何故俺に聞く？

「そいうのは本人に聞いてくれ。それよりそっちの子は？」

俺が永峰に聞くと永峰に紹介されるより早く、その子が自己紹介を始める。

「あ、わたし　阿川　美里です。それよりあの、士郎さんってもしかしてこの世界の人じゃないんではないですか？」

そんなことを大声で聞いてくる。一応一部の人意外俺が異世界人だということは知らないことになっているので勘弁してもらいたい。

幸い周りが騒がしいため特に聞きとがめられるようなことはなかったようだが。

「ああ、そうだがそのことは一応秘密なんであまり大声で言わないでくれ」

「あ、ごめんなさい。その、もしかして日本のかたですか？名前の響きからしてそうかなって思ったんですけど」

やはり彼女達は俺の居た世界の可能性が高いというのは間違っていなかったみたいだ。

でなければ”日本”なんて単語が出てこないどろう。
だがまだ並行世界の可能性は捨てきれない。
楽観するには早いだろう。
なんとなく視線を横に向けると永峰に抱きつかれ困った顔のリリカがこちらに視線を向けてきているが大丈夫だろう。
さて置き彼女の質問に答えなきゃな。
「そうだけど、キミ達もやはり日本から来たのか。名前や外見からしてそうだとは思っていたんだが」
阿川は「やっぱり」とか言っている。
「でも衛宮さんはどうやってこの世界に来たんですか？もしかして帰り方知ってるとか」
それが分かってれば俺も苦労しないんだけどな。
「いや、俺も気がつけばここに来てたって感じで何も分からないんだ。力になれなくてすまない」
「え、そ、そんなことないですよ」
そして永峰は「衛宮さんも一緒なんですね」なんて呑気な事をリリカを抱きしめながら言っている。
おい、そろそろ放してやらないとリリカが本気で苦しそうだぞ。

「ところでずっと気になっていたんだがそれってメイド服だよな・・・永峰だけ何でメイド服なんだ？」

「あ、それはですね――――」

そのとき永峰の声を遮って世刻の声がこの場に響いた。

『みんなも聞いてください。実は・・・・・・俺達は、貴方達が言う天使じゃないんです』

その声に辺りは静かになる。

そして自分達がどういう経緯でこの世界にに来たかを説明し、帰りたいだけでこの世界には干渉するつもりはないと言う。

確かにこの子達の言い分もわかるし、俺も子供をこの戦争に関わらせるのは反対だ。

しかしこの村人達は簡単には納得しないだろう。

村の人は彼らを天使様として歓迎しているのだ。

それに言うタイミングが些か悪いように思う。

皆が世刻達をみている。

そしてその視線は次にクロムウェイのほうを向く。

どうやら村の者はクロムウェイに意思を託したみたいだ。

クロムウェイは一度息を吐き、更にその判断をカティマに託した。
いや俺からは丸投げしたようにも見えなくもないが気のせいだろうか。
とりあえずカティマに託した。
そしてさすがカティマというべきか、そのカリスマを持って村人を説き伏せ
尚且つ話が世刻達が協力する流れで進んでいく。
遂には世刻に「わかった」とまで言わせてしまった。
そしてここに居る者たちだけでは決められないから学校に戻って話し合ってから正式な決定をさせて欲しいと。
俺は反対だがここまで話が流れたら、俺1人が反対しても意味はない。
そしてもし、話合った結果が協力する形になった場合かなり無茶だが俺がこの子達を守るしかない。
俺よりもこの子達が強いのはわかっている。
だがなんの覚悟もなく巻き込まれ、そして死なせてしまうかもしれないなんて俺は認められない。
カティマの言い分もわからなくはない。

確かにこの戦争に勝つためには今の戦力だけでは足りない。
勝つためには神剣使いの力が必要なのはわかる。
しかしこの三人以外は何の力も持たない普通の一般人。
しかも三人も含めて皆子供だ。
たまたまこの世界に流れついただけのこの子達を巻き込むのはやはり納得できそうにない。
俺はカティマに対して多少の苛立ちを覚えながらも宴は終了し、この日の夜は静かに、しかし俺の心の中に小さなシコリを残しながら更けていった。
そして明朝この世界の来訪者達はものべーへと帰っていった。

剣の世界１１（後書き）

原作では村人と望達で衝突がありましたが、そこは士郎が先に報告に帰ったために回避です。

かなり淡々と話を進めてしまったかなと思わなくもないです。

ただ、この話を詳しくすると二話使っても終わるかわからないのでこういう形にさせてもらいました。

ちなみに私は一話の量を７ｋを目安に書いています。

感想のコメにも書いたのですが一応ここでもお知らせをさせていただきます。

一応現在少し先まで書き上げているのですが暫くこの作品の投稿を控えようと思います。

理由としては作者の知識不足です。

書いてて色々と無理がありすぎましたので。

原作をやり直してもう一度見直しをかけようと思います。

一応Ｆａｔｅ、聖なるかな両方をプレイしようと思うので投稿はしばらく先になると思います。

まことに勝手ですみません。

再開したときにまた読んでもらえたら幸いです。

では。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3994l/

sword of sword

2011年10月7日03時10分発行